2017
1964
1517

Reformation 500th

宗教改革 500 年共同記念

平和を実現する人は幸い

2017.11.23

●1517 年　宗教改革のはじまり　●1962-65 年　第 2 バチカン公会議　●2017 年　宗教改革 500 年

世界の教会に分裂をもたらした宗教改革の当事者として、祈り、対話し、未来へと歩み出す

報告書

日本福音ルーテル教会・日本カトリック司教協議会

目次

主催者あいさつ・02
日本福音ルーテル教会　総会議長　立山忠浩・03
日本カトリック司教協議会　会長　髙見三明・05
共同記念公式記録　白川道生・07
共同声明　教皇フランシスコ／ムニブ ユナン・22
来賓挨拶　ティース グンドラッハ・25
来賓挨拶　フランク ロンゲ・28
開会の祈り・32

シンポジウム「平和を実現する人は幸い」
長崎からの声ー苦難の歴史を踏まえてー　橋本 勲・35
「罪について」
～それにも拘らずをいただく福音　石居基夫・42
エキュメニズム、わたしたちの祈り求める
平和と共生の未来　光延一郎・49

共同記念礼拝「すべての人を一つにしてください」
礼拝式文・65
礼拝説教　髙見三明・84
礼拝説教　立山忠浩・89

礼拝式文解説　石井祥裕・93
シンボルフラワー「ヒロシマの原爆とカンナの花」・99
祈りの折り鳩・102
感謝の言葉・103
フォトグラフィ・104

平和を実現する人は幸い

今から500年前、1517年にはじまった「宗教改革」。ドイツから、やがてヨーロッパ全体に広がった改革運動は、ルネサンスと並んで中世後期の出来事として、世界史の教科書を通して多くの人が学ぶことでしょう。

その内容は「ドイツの修道士マルティン・ルターが当時の教会の課題について討論を呼びかけた。異端とされながらも広く支持を得る改革運動となり、ローマを中心としたカトリック教会に分裂がおこってプロテスタント教会が生まれることになった。ひいてはヨーロッパ全体がこの分裂の中で大きな戦争に巻き込まれていった。」そういったものではないでしょうか。16世紀の西欧の歴史の一コマが、知識として固定化されています。

しかし、その分裂・争いは、その後どうなったのか、そのゆくえを知る人は決して多くはありません。

宗教改革500年。この年が特別に記念されるのは、この歴史が克服された事実を証しするためです。かつての断罪と争いは、相手を尊重した対話によって相互理解を深めることで、もはや克服されたのです。

私たちの歴史は、過去の一点によって固定化されるのではありません。積み重ねられていく対話と、そこに働く英知、決断、実践によって、新しい1ページが絶えず開かれていくのです。ローマ・カトリック教会とルーテル教会は、歴史の当事者として、その歩みを刻んできました。そして日本においても、両教会は、「祈ること」、「対話すること」を通して未来へと歩みを進めるために、長崎・浦上天主堂（カトリック浦上教会）で宗教改革500年共同記念行事を行うと決定しました。

長崎は、キリスト教弾圧・迫害を体験した町であり、20世紀の世界の悲惨を象徴する、原爆第二の被爆地でもあります。今なお戦争の悲惨さを語り伝え、信仰と希望と忍耐をもって平和を実現する歩みと行動を続けている「長崎」の地に共に集い、「和解と平和」を実現する道への出発を証しする時となるように願っています。

宗教改革500年、共同の証し

日本福音ルーテル教会
総会議長　立山忠浩

宗教改革500年の年に、日本カトリック司教協議会と日本福音ルーテル教会が共同でシンポジウムと礼拝を開催できることを心より嬉しく思います。宗教改革500年という年が、新たな希望に満ちた歩みへ踏み出す礎となるに違いないと確信するからです。

1517年にマルティン・ルターによって始まった宗教改革は、私たちルーテル教会から見れば、当時のカトリック教会の誤りを正したのであり、神様の御心に叶うことでした。しかしカトリック教会からすれば、ルターは教会の教理を否定した異端児であり、秩序を乱すとんでもない輩だったことでしょう。そして西ヨーロッパで始まったこの運動に後押しされるかのように、フランシスコ・ザビエルらによる海外宣教が始まり、日本にもキリスト教が初めて伝来するきっかけとなりました。ですから日本においても、むしろカトリック教会の方を神様が祝福されたのだと受け止めたことでしょう。しかしこれらは、自分たちの側からの理解に過ぎなかったのです。その結果、互いが背を向け合い、無関心になり、少なくとも積極的な対話が積み上げられることはほとんどなかったのです。

しかし、宗教改革500年を迎えた今、このような過去の歴史がずいぶんと修復されてきているように感じるのは私だけではないでしょう。 第二バチカン公会議の『エキュメニズムに関する教令』（1964年）を契機にして、ローマ・カトリック教会とルーテル世界連盟（LWF）による国際的な神学対話が積み重ねられ、2013年に出版された『争いから交わりへ』（日本語訳は2015年）はその象徴的なものとなりました。お互いの過去の「争い」が、今は「交わり」の道を歩んでいることを世に顕したのです。もちろん、両者の神学的な理解や教理がすべて一致しているのではありません。重要なことは、過去の争いや無関心を止め、互いが顔を向け合い、対話と交わりの道を歩もうとしていることです。日本においても、神学的な対話や一部の有志による実践的な取り組みだけに限定されるのではなく、より多くのキリスト者にまで浸透していくことが重要なことだと思います。この願いを込めたのが、この共同のシンポジウムと礼拝なのです。

シンポジウムには「平和を実現する人々は幸いである」（マタイによる福音書5章9節）という主題が掲げられ、礼拝は「すべての人を一つにしてください」（ヨハネによる福音書17章21節）と題されました。いずれも主イエス・キリストのみ教えです。このような平和と一致を求めるキリスト者の祈りの集いは小さな一歩かもしれませんが、池に投げ込んだ小さな石が次第に波紋を広げて行くように、この一歩が大きな広がりを作り出してくれることを願っています。世界中に争いが満ち溢れ、不安感がますます増大し、日本においてもそれに対抗するためにもっと強力な手段で身を固めようとしているように思えてなりません。争いがさらなる争いを生み出していく道に向かっているのです。このような状況の中で、「争いから交わりへ」と歩み始めている両教会の集いは意義深いものとなることでしょう。宗教改革500年を迎えたキリスト教会が、新しい歩みを行っていることを目に見える形で世に証しする機会となることを心から願っています。

末尾になりましたが、平和をたえず祈り、その願いを世界に発信し続けている長崎の地で、このような共同の企画を催すための場を提供くださったことを、髙見三明司教協議会会長と日本カトリック司教協議会の皆様に、そして浦上教会をはじめとするカトリック教会の皆様に心より感謝を申し上げます。

日本カトリック司教協議会
会長　髙見三明

宗教改革500年にあたる今年11月23日に、日本福音ルーテル教会と日本カトリック司教協議会の共同主催による記念シンポジウムおよび共同記念礼拝が長崎のカトリック浦上教会で行われることは、いろいろな意味で有意義なことだと思います。

1. 人間は分裂しやすい存在だとは言え、一致こそ本来の姿であると再認識する機会

人類は最初の人の罪の結果、神から離反し、同時に人間同士の分裂を広げ、深めてきました。それは現代世界の状況が示す通りです。教会も例外ではないようです。イエス・キリストは、ご自分の死と復活によって人類を罪から解放し、12使徒を中心にご自分を信じる人々を「唯一の教会」、すなわち「神との親密な交わりと全人類一致のしるし、道具」として設立しました。この教会は、初めから分裂の兆しはありました（コリントの信徒への手紙一1章10～13節など参照）が、聖霊に導かれて紀元7世紀までに正統信仰を確定し、さらに発展していきました。ところが、キリストの祈り（ヨハネによる福音書17章20～23節）に反して、1054年に東方と西方に大きく分かれ、西方教会は、1517年10月31日にルターが手がけた「宗教改革」によって分裂していきました。1534年には英国国教会が分離し、唯一のはずの教会は多種多様に分かれていきました。しかし、このような分裂は、明らかにキリストの意志に反し、世の人をつまずかせ、福音宣教の妨げとなっています（『エキュメニズムに関する教令』1項）。

2. 改革の意図と分裂の原因を検証する機会

聖アウグスチノ修道会司祭だったルターの意図は教会の「改革」だったわけですが、カトリック教会の指導者たちは自己改革の必要性を感じるよりも、ルターの言う「改革」の中身に反発し、さらには聖書、信仰、義認に関するルターの主張がキリスト教教義の核心に抵触すると考えるようになったのです。残念ながら別々の異なる教会が生まれ、対立することになりました。

だからこそ、宗教改革は教会の改革だったのか分裂だったのかという問題も含めて、過去の記憶を浄め癒すと同時に、キリストの福音の真理に合致した一致の回復を目指したいと思います。そのためには神の啓示と聖書、信仰と義認、教会論、秘跡論などの根本的な信仰の要素を可能なかぎり共通に理解するようにしたいものです。

3. 争いから交わりに向かう姿は、現代社会にメッセージとなる

教会の中にはいつも改革や一致のために働く人々が与えられてきたことを忘れてはならないと思います。とくに過去半世紀において、カトリック教会は、第二バチカン公会議で教会や啓示に関する憲章（1965年）、『エキュメニズムに関する教令』（1964年）を公布し、遅まきながら19世紀以来の教会一致運動を積極的に推進しました。とくにルーテル教会とは、1999年に『義認の教理に関する共同宣言』（教文館、2004年）を、2013年には宗教改革500年に向けて歴史の検証と未来に向かう道筋を提言した共同文書『争いから交わりへ』（教文館、2015年）を発表しました。昨年10月31日には両教会の共同主催により、フランシスコ教皇とルーテル世界連盟ユナン議長が、同連盟発祥の地、スウェーデンのルンド大聖堂で共同記念礼拝を行いました。

両教会は、キリストの一つの体に属していることを認め、信仰の多くのものを共有していることを喜びたいと思います。常に一致の視点から再出発し、十字架上でいのちを与えるほどのキリストの愛によって各自自らを変容させ、福音の力を再発見し、世に対して神の憐れみを証ししながら、目に見える一致を目指して努力しなければなりません。

キリシタンの迫害と被爆の地である浦上で、両教会が争いから交わりへと転換する姿を発信することによって、両教会自らの和解と交わりだけでなく、世界の和解と平和のために寄与することができれば幸いです。

公式記録

◇共同主催式典
「宗教改革500年共同記念　～ 平和を実現する人は幸い ～ 」
日本福音ルーテル教会（Japan Evangelical Lutheran Church）・
日本カトリック司教協議会（Catholic Bishops' Conference of Japan）
◇日時・会場
2017年11月23日、カトリック浦上教会大聖堂

Ⅰ. はじめに
(1) 共同記念企画の背景
2017年は、キリスト教の歴史における一つの節目の年でした。M.ルターの提題に端を発して、ドイツに宗教改革運動が起こってから500年を数える年になり、「宗教改革500年周年」を記念する気運が世界各地で起こりました。とりわけ、ドイツでは様々な記念行事が始まっており、キリスト教徒のみならず、ソーシャルニュース・トピックとして、幅広く関心が集まっている様子が報じられました。

この記念の到来をふまえて、2013年に、「一致に関するルーテル＝ローマ・カトリック委員会」による神学対話を経て一つの文章が完成しました。宗教改革の歴史検証と未来に向かう道筋を提言した共同文書である
『From Conflict to Communion』 Lutheran-Catholic Common Commemoration of the Reformation in 2017
が発表されました。（完成したこの文書は、2015年、日本でも両教会の翻訳委員による共同訳で刊行（教文館）されました。『争いから交わりへ』 -2017年に宗教改革を共同で記念するルーテル教会とカトリック教会-）　宗教改革500周年の到来を前に刊行された『争いから交わりへ』には、両教会による歴史検証と、歴史の中の過ちを認め、一致を両教会の責務とする、未来に向かう道筋が提言されています。

この頃から、歴史の当事者である《ローマ・カトリック教会》と《ルーテル教会》は、「宗教改革を共同で記念する」という情報が聞かれ始めるようになります。そして、2016年1月、「カトリック代表のフランシスコ教皇と世界ルーテル連盟代表のユナン議長が共同主催者となって、2016年10月31日に、宗教改革を共同で記念する礼拝をおこなう、場所はLWF発祥の地スウェーデンのルンド大聖堂」という

公式発表が世界に向けて報じられました。

（ローマのルーテル教会を訪問した教皇　2015年11月）

・このニュースは世界各国に伝わり、日本でも2017年までに78回を重ねてきた「ルーテル＝カトリック.エキュニズム共同委員会」も、500年を経て変化した両教会の新しい関係を世界に伝えようとする、この脈絡が認識されるようになりました。そして、両教会の対話を経て、日本の両教会は「宗教改革500年をどのように迎えるか」についてひとつの合意に至りました。

*《日本カトリック司教協議会》と《日本福音ルーテル教会》は、「2017年に、長崎のカトリック浦上教会で祈りと対話の企画を共同主催する。テーマは『平和を実現する人は幸いである』、との決定に「導かれた」のです。

・そして2017年11月23日、カトリック浦上教会の大聖堂において実現した情景は、喜びに満たされた時間・空間でした。記念への備えの実務に当たったものとしては、あらかじめ描いた絵というよりは、当日、はじめて全容を見た、予測を遥かに越えていた、と「共同記念に召された」想いに導かれておりました。

・長崎の共同記念が成立してゆく経過を記録に留めるべきと要請を受けましたので、準備委員会における主要な対話の幾つかを記してまいります。

《 日本からの発信 ～ 対話の力の立証 ～平和の実現への貢献 》

宗教改革は、ひとつであった教会に激しい争いと痛みをもたらしました。両教会が負った過去の傷をいだきながらも、こわばりを解きほぐしていったのが、「対話」の積み重ねでした。400周年、450周年においては、ひとつの身体であった教会には、分裂の痛みが色濃く残っていましたが、500年を迎えて、ルター派教会とローマ・カトリック教会は、主の導きによって、宗教改革を共同で記念する意義と根拠を見出し、硬直していた状態が癒され、回復された関係が持てるように変えられたのです。

宗教改革から500年を経た現代、エキュメニズム＝教会一致が目指される時代に移ったと言われています。この宗教改革500年の到来に合わせて、かつての激しい対立を克服し、両者はいまや一致と協力のためにひとつのテーブルを囲んでいる。争いから和解に転換した両教会が、声を合わせて、争いの克服と和解の促進を呼びかけてゆく。このような変遷を証言することを、宗教改革500年の“記念”とするのであれば、両教会が共同して執り行うべき記念になる、と意見の一致をみました。また、この記念を、両教会の内部構成員のためだけに行う行事とせず、エキュメニズムの歩みを前に進める、一つのモデルにしたいとの意図も確認されました。現代の公共世界に起きている争いと結び、こんにち改革すべき状況・課題に取り組む、教会から公共世界へのメッセージとなるよう、両教会に託された使命に基づく企画をと思索しました。

・基本理念では合意にいたりましたが、いざ企画に落とし込むプロセスは、あたかもパズルのピースを一つ一つはめてゆくような歩み方となりました。日本の両教会では過去に前例のない共同主催企画であったため、準備作業には時間と労力を要しました。

Ⅰ.【宗教改革を記念する必然性を巡る対話】

立ち上がりは、「共同委員会」の場で、ルーテル側が述べた意見からでした。「2017年は宗教改革から500年を迎える、ルーテル=カトリック国際委員会レベルでは、宗教改革を共同で記念する気運が高まっている、日本でも共同で記念行事を行えないでしょうか」

当初、この提案は委員会に戸惑いをもたらしました。「宗教改革500周年の到来は、ルーテル教会にとってはアイデンティティーにかかる事柄で重要視されるのは理解できる。しかしカトリック教会にとっては、同じように宗教改革を記念する必然性は理解されないだろう」、「日本の現状を見れば、ルーテル教会とカトリック教会のあいだに切迫した争いは見出されない。むしろ日本では少数のキリスト教が様々な分野で協力している活動や働きも少なくない。このような状況で『争いから交わりへ』がテーマといっても実感に乏しく、ヨーロッパとは認識が異なるだろう」、「そもそも、ヨーロッパの争いをそのまま日本が引き継ぐ必要はない」といった率直な意見や指摘が出されました。

日本のカトリック教会にとって宗教改革を記念する必然性は見いだしにくい、この感想は、日本と世界、両教会の相違を考えさせられた、最初の立ち止まりでした。けれども、相違を理由に対話のテーブルを立つような雰囲気はありませんでした。

はじめの段階で気づかされたのは「対話」の成立要件です。即ち、対話のテーブルを囲んでいても、片方が必然を述べてゆくだけであれば、全く対話的な状況は生まれず、両者の必然が揃わないならば、いくら時間を積んでも対話の成果は得られない、そのような着想が与えられました。

そこで、基本構図を見直し、一枚の概念図が作成されました。後に、改訂を重ねる「企画書」の表紙となるわけですが、こちらがその図版です。

・当初は、「1517年、95箇条の提題」、「2017年＝宗教改革500年」とつないでゆく構図を考えていたわけですが、これではルーテル教会だけにしか必然性が見いだせません。そこで、カトリック教会の重大な出来事である、1964年、「第二バチカン公会議」において打ち出された、改革する教会の姿勢を組み合わせる形で、基本構図を新たにしました。

・カトリック教会の教会史に大きな足跡を残す「第二バチカン公会議」において、ローマ・カトリック教会は自らで教会の姿勢を転換し、すべてのキリスト者間の一致を回復する、とエキュメニズムの推進を使命とする教会の新しいあり方を宣言しました。1964年に公布された、『エキュメニズムに関する教令(Unitatis redintegratio)』です。大改革を推進する推進する、ローマ・カトリック教会の決意は、大きな驚きとポジティブな影響を世界中に与えました。

Ⅱ.【エキュメニズムを巡る対話】
・500年を経て、こんにち両教会の関係は新しい様相に転じました。ここに至った1517年―1964年―2017年という道筋を開示し、平和の実現へと方向転換した実例の証言を骨子とする、宗教改革500年の企画構想という方向で対話委員会が動き出しました。

・この道筋は「エキュメニズムに関する教令」を通して打ち出された、教会の一致を回復するために「祈ること」・「対話すること」を推進する行動指針と重なっていました。そこで、対話委員会は、我々が歩んできた日本のエキュメニズムの道筋を改めて振り返る対話がなされました。

・日本福音ルーテル教会とローマ・カトリック教会の間の対話は、1985年から始められています。両教会から選出された委員からなる「ルーテル/ローマ・カトリック共同委員会」は、これまでに(～2018年4月)79回を重ねてきています。最も大きな対話の成果は、ルーテル教会とローマ・カトリック教会の代表によって調印された『義認の教理に関する共同宣言』(1999年)の発表です。日本でも、この文書は両教会の翻訳委員によって共同訳として2004年に刊行され、この出版を感謝する合同礼拝が、10月31日、東京のイグナチオ教会マリア聖堂で行われました。

・また、ローマ・カトリック教会の「第二バチカン公会議」で公布された「エキュメニ

ズムに関する教令」(1964年)の公布50周年を記念して、2014年、カトリック教会、日本聖公会、日本福音ルーテル教会による「エキュメニズム教令50周年合同礼拝」が東京カテドラル関口教会で執り行われました。

・余談ではありますが、教会間の継続的な対話が可能となる要因について、一つの考察がありました。日本では、ルーテル・カトリック・聖公会以外の間でも、エキュメニズム対話が進んだ時期がありました。ところが、それらの公式な対話委員会のほとんどは、続いておりません。委員会の場で、新たに参与した委員が自説を述べ、ひいては前任者の否定や、過去の認識合意に異を唱えるような立場を鮮明にするような言説が強くなると、教派性に基づく神学対話は積みあがっていかない等の体験談は印象的な指摘でした。

・500年前に分裂したカトリック、プロテスタントの系譜にある両教会ですが、国際的な対話を続け、もはや両者は背を向けあう対立状態を改め、交わりを回復し、教理的な主要課題に対しても基本線で見解の相違がないと合意しています。またキリストの一つのからだに属していることを確認して、さらに主イエスの祈りに導かれて対話を続ける方針を共有して歩んでいます。

・2013年、カトリック教会とルーテル教会の国際的な対話委員会である「一致に関するルーテル＝ローマ・カトリック共同委員会」によって、来る宗教改革500年をどのように記念するかについて取りまとめた共同文書　『From conflict to Communion』が発表されました。

・この発表を受けて、日本の両教会のエキュメニズム共同委員会でも日本語翻訳の出版を決定し、両教会の委員が作業に取り掛かりました。そして2016年、宗教改革日となる10月31日に刊行、本のタイトルには『争いから交わりへ』という訳題が記されました。分かれていた両者が一致を目指して長い時間と努力を積みあげた結果、完成した共同文書は、世界並びに日本へも、さまざまな意義をもたらしました。

・『争いから交わりへ』という宣言において、宗教改革を共同で記念する合意は、対話によって促進された　相互理解が源となって、交わりが可能となった、という道筋が鮮明に示されていました。

　加えて、新しい出発の決意表明である共同文書には、キリストの一つの体に

属していると認める双方の教会が、記念を通して通して確認すべき「5つのエキュメニカルな責務」が記されていました。

・共同で記念する合意に至った経緯と変化も説明されていました。「エキュメニカルな対話は、キリスト教の真理を共同で探求することだからである。」「両教会を分離する要素よりも、結び付ける要素が多いことを認識するようになった。」

この脈絡を視野に入れながら、日本の両教会が宗教改革を共同で記念する意義について対話した結果、「こんにち、両教会に求められている責務、使命」への関心が強まり、共同記念の企画構想の方向性も定まりはじめました。

Ⅲ.【双方の教会に共通する責務・使命を巡る対話】

・今回の共同企画の主たる要素を列挙すると、対話の関心が、いずれもこんにちにおける教会の責務と使命に結びついた内容になっているのが判ります。
(1)平和の実現を祈る両教会
(2)日本での開催＝長崎(原子力爆弾、被爆)、(広島、長崎、福島)
(3)教会を超えて、共に記念する(若者＆世界共通の祈り.ドイツ)
(4)平和の実現に努める人との協力連携、＝諸宗教・超教派、被爆カンナ

(1)平和の実現を祈る両教会
対話委員会では、双方から日本の教会を囲む現状認識や課題を巡る対話を重ね、具体的なアクションプランを決定してゆきました。

・日本でも、「宗教改革」の歴史を想起できる人は多いだろう。ドイツに起こった史実ではあるが、世界史の教科書で学ぶから。およそ「1517年、ドイツで、マルティン・ルターなる人物が当時のカトリック教会に抵抗した。そこでキリスト教が分裂した。」といった内容ではないか。

・学習した人々の知識は500年前で止まっている。その後、果して、大きな分裂はどうなっているのか、それを知る人は少ないだろう。歴史は動いた。両教会の間にあった激しい争いは克服され、対立は現代に引き継がれていない。対話の力によって、和解がなしとげられている。この史実から現代への転換、歴史の動きを、とりわけ若者たちへと伝えてゆきたい。

どのようにすることが可能であるか？

・そこで、「小冊子」を制作して頒布する、と決定しました。対話委員会では、青少年が宗教改革の歴史を学ぶ、公式で最初の入口となる、学校の授業を想定して、読み手はキリスト者ではない若者とイメージし、ミッションスクールの学生や信徒たちが手に取ってもらう水準で編纂し、ルーテル並びにカトリックのミッション系諸学校で配布されました。（なお、このリーフレットは、共同記念の当日参列者にも配布されました）

教会の責務を巡る意見交換では、教会の外に目を転じ、宗教に対する見方にも関心が寄せられました。

今の時代、両教会が課題としてゆく関心は何かに関する対話から抽出された共通認識のひとつは、公共社会が、宗教全般に対して不信感・嫌悪感を抱いている、との考察でした。こんにち、国家間、民族間、宗教間の対立や争い、テロが激化する様相をメディアは繰り返し報道しています。これを視聴するうちに、宗教というものを警戒する感覚が生じているのではないか。対立の原因を宗教に結びつけ、あたかも宗教が争いや暴力を生み出している、と宗教に対する種々の誤解が拡散してはないか。といった危惧が委員会の議論となりました。

このように、対立の様相を深める現代において、宗教に向けられる大きな期待が「平和の実現」。これに呼応してゆく責務は喫緊の課題である。翻って、かつて激しく争った両教会が、偏見や誤解を乗り超えながら対話を続け、『争いから交わりへ』と転換した道筋を証言する。共に祈る姿を可視化することに両教会の当事者性がある。これならば宗教改革から500年の記念にふさわしい、と、共同記念

の意義と必然について合意形成に至りました。

こうした流れを受けて、「共同礼拝」と「シンポジウム」を柱とする企画概要を決定しました。世界の中では日本はローカルな地域の教会だが、「共同記念を、平和を祈る呼びかけの機会に」と願いつつ、日本から、一つになる姿を可視化して発信する。との合意は、共通する責務に関する認識を基盤にして形成されてゆきました。

「シンポジウム」は、分裂を分裂のままとしないため、地道に対話を繰り返してきた「分裂から和解へ」の道筋を証言しよう。何が和解の推進力になったのか。歴史の当事者として気づかされた事柄は何か？単に過去の想起や対話成果の説明に留まらず、実践行動の提言によって託された責務に応えようと構想しました。

◎シンポジウムは、準備の対話にのぼった関心を基に、シンポジスト選考と依頼が行われました。

★（主題）「平和を実現する人々は幸いである。」 マタイによる福音書 5:9

◎現代、日本に生きるという脈絡で、「平和」、「共生」を学ぶ。3人のシンポジスト。

1）主題を巡る、長崎からの声。
困難と忍耐・信仰、平和希求する長崎の形成について、その歴史性と地域性から学ぶ。

2）「エキュメニズム」。我々の祈り求める未来＝共生と平和のビジョン。
「エキュメニズム」、「オイクメネー」からの日本社会への提言。分裂から共生への道を模索する。
同じ時代、地球＝共に住まう家に暮らす人間の尊厳を守り、平和を実現する心と行動の一致。

3）平和を実現するために「人」にまなざしを向ける。人間の罪の問題と克服。
イエス・キリストの福音が持つ力を再発見する。平和の実現を深化に必要な要素を考え、問い直す。

委員会のこのような対話は、教会の関心から公共社会を見てゆく方向の視野と感じられますが、実際には、公共社会の関心から教会を見る、という、構図の転換でもありました。こんにちの両教会に共通する使命、役割を模索し、教会に向けられる市民の関心を対話のテーブルにあげた結果、共同記念の必然と意義に関する合意は鮮明なものとなってゆきました。

委員会では、これまで半世紀のエキュメニズム対話が、典礼や教義など両教会

会間の神学理解に比重が置かれていた側面を認め、これから両教会が現代の共通の責務について対話し、こんにち世界に現存する環境や格差などの問題に一致して取り組む関係を構築する方向に視野を開いてゆくだろうとの予測も語られました。

(2) 日本における開催

当初、対話委員会で会場候補に挙げられた提案は「広島、長崎、福島のいずれか」でした。視野にあったのは、被爆を体験した国である、日本ということ。2011年には原子力発電所事故が発生したこの国における開催を考えて、原子力、核兵器を巡る、人類史に残る歴史を有する場所で、との想いでした。

具体的な実施課題と可能性を考慮しながら検討・関係者に相談した結果、開催地は「長崎」と決定しました。長崎を開催地とすることで、隠れキリシタン、被爆の歴史を持ち、信仰の自由や平和を想起させる長崎を開催地とすることで、参加者のみならず、日本ならではの有意義な発信が期待できると見込みました。

振り返っていま、「導かれて」私たちは長崎での開催を決定していた、という感想が拭えないほど、様々な意義が鮮明にもたらされました。

・長崎は、キリスト教の弾圧、迫害を体験し、20世紀の戦争の悲惨さを象徴する原子力爆弾が投下された、第二の被爆地でもあります。長崎の町は戦禍によって壊滅的な被害をうけましたが、原爆によって崩壊した浦上天主堂は元の形へと再建されました。カトリック長崎大司教区の浦上教会は、戦争の痛みと悲惨さを語り伝えながら、平和を実現するための祈りと行動を続けておられる長崎の中で、ひときわ大きなシンボルのような存在感を示しています。

・日本のキリスト教会を代表する教会のひとつに挙げられる長崎浦上教会の大聖堂に集まり、キリスト教の諸教会・教派が、対立から和解へ歩み出して祈る姿を「対立から平和の実現に向かう実例・モデル」として広く示す。日本ならではの「宗教改革の共同記念」であったと振り返り、実現に導かれた幸いを感謝しています。

・おりしも2017年は、1867年に起こった「浦上四番崩れ」から150年を迎える年でした。浦上キリシタン3394人が捕縛され、津和野など全国へ流配され、命をかけた「キリストの信仰に生きる旅」が始まった出来事を想起する時と巡り合せが重なりました。国家的な宗教弾圧・信教の自由に対する壮絶かつ暴力的な抑圧で

あった迫害の足跡を想起しながら、その旅から150年後に、浦上の地で「キリストの信仰に生きる旅」と「平和・和解の実現に向かう旅」の出発も意識されました。

(3)教会を超えて、共に記念する(若者＆世界共通の祈り.ドイツ)
・先んじて、2016年10月31日、スウェーデンにあるルーテル教会の「ルンド大聖堂」で、ローマ・カトリック教会の教皇フランシスコとルーテル世界連盟の議長ムニブ・ユナンが共同主催者となって礼拝が行われるというニュースが届きました。
・会場となるルンドは、ルーテル世界連盟の発祥の地であり、この地をカトリック教会の現教皇が訪問して、宗教改革を記念するための共同礼拝が行われる、かってない出来事です。
　その礼拝の様子はライブで世界に配信されました。祭壇前で両代表は共同宣言にサインをして、ひしと抱き合いました。対立していた時代を克服した、新たな姿を映しだした映像は、世界に喜びにもって伝えられました。

*両教会代表による署名:「共同宣言」(ルンドにおいて カトリックとルーテルが宗教改革を共同で覚えるにあたって)―本文後掲します

・共同記念企画の主催は、《「日本カトリック司教協議会」(会長:髙見三明大司教)と「日本福音ルーテル教会」(総会議長:立山忠浩牧師)が、共同主催する公式行事とする》旨の決定が、両教会の機関決定によってなされました。両教会が、委員会のレベルでなく、全体教会のレベルで共同開催する、との決定は過去に前例がなく、今までの水準を超えた開催となりました。

　両教会の合意に基づき、その思いを目に見える形で、どうあらわしてゆくか、そのための企画検討は時間を要しました。企画の構想は、「ルーテル・カトリック エキュメニズム委員会」での対話によって調整が進められましたが、企画準備の実務は「共同記念合同準備会委員会」を設置して、推進するとされました。
　選出された委員は、ルーテル側では石居基夫牧師(ルーテル神学校校長、全国教師会会長)、白川道生牧師(教会事務局長・宣教室長)、安井宣生牧師(本郷教会牧師、広報室長、全国教師会書記)、カトリック側では、宮下良平神父(中央協議会事務局長)、光延一郎神父(イエズス会司祭、上智大学神学部教授)、久志利津男神父(浦上教会主任司祭)、石井祥裕さん(オリエンス宗教研究所)の計7名でした。「共同記念準備委員会」は、東京並びに長崎にて、足かけ二年間、合計17回の会合を行いました。

またエキュメニカルな式典企画とし、教派を超えて参列を呼びかける方針としました。当日には日本のみならず、出席を賜りました。バチカン駐日大使が長崎にお越しくださいました。

*Joseph Chennoth大司教（駐日ローマ教皇大使）

また、宗教改革の歴史が生じたドイツからも出席を賜りました。参列の背景には、2016年11月の第11代ドイツ連邦共和国大統領である、ヨアヒム・ガウク大統領の浦上教会訪問がありました。この際、髙見三明日本カトリック司教協議会会長と海外出張の立山議長に代わって、大柴譲治エキュメニズム委員会委員長が大統領と接見しました。「ドイツの国で起きた分裂の出来であるが、日本では平和を実現するために、2017年に記念企画を行おうと考えている。ぜひ祝福をしてほしい。ドイツからも参列者を送ってくだされば幸い」と親書を渡しました。すると、共同記念式典のために、ルーテル教会、カトリック教会、双方から一人ずつの代表者が来日され、国を超えて、共に祈りを合わせてくださいました。

*Dr.Frank.Ronge
（ドイツ.カトリック司教協議会事務局長代行、信仰と養成局局長）
*Dr.Thies Gundlach
（ドイツ福音主義連合副議長、神学・教育部門委員長）

「長崎浦上での共同記念礼拝の開催決定」いう情報が流れると、双方の教会の信者からの問い合わせが始まりました。準備委員会は当初より聖職者・教職のみが出席するのでなく、出席を呼びかける対象には一般信徒が含まれていました。同時に、両教会を超えて祈りを合わせる意図をもっていましたので、ひろく開催情報の広報も開始しました。ただ現実的な想定として、全国から長崎に旅をして、万一参列者多数で入場が叶わない状況が生じることがないようにと考え、入場整理券を発行することになりました。

☆共同礼拝（別項にて説明）

共同記念礼拝のテーマに即して、聖書のみ言葉には「すべての人を一つにしてください」（ヨハネによる福音書17：21）とのイエス・キリストの祈りの言葉が示されました。礼拝の形は、2016年のローマ・カトリック教会とLWFとの共同文書である『Common　Prayer』と、2017年の一致祈祷週間の式文を参考にし、加えて日本で過去に2回、両教会が合同で行った礼拝式文を踏まえて、み言葉とシンボリカル

な所作を含めた礼拝式文が作成されました。

共同礼拝では、ルーテルからは立山忠浩牧師（日本福音ルーテル教会総会議長）が、カトリックからは髙見三明大司教（長崎教区／日本カトリック司教協議会会長）が説教をされました。ルーテルの牧師たち、カトリックの司祭団、どちらも白いアルバに赤いストラを着用しました。

聖壇に並んだ情景からは、ルーテル、カトリックの見分けがつきません。分裂と対立を乗り越えて、キリストの一つの体につながっている様相と、両教会がキリストの元で一つにされる、目に見える形が現れされたのではないでしょうか。ルーテル、カトリック、そして祈りを集める人々、1294人が浦上教会の大聖堂を埋め、賛美と祈りがささげられました（内訳：ルーテルで621名、カトリックで628名、来賓・一般で45名、報道関係者のぞく）。

この礼拝の席上献金は、ルーテル（LWF）とカトリック（カリタス）が共同で運営する、難民支援活動にささげられました。

(4)平和の実現に努める人との協力連携 ＝ 諸宗教・超教派、カンナ

準備委員会は、この日を平和の実現に結びつく実践行動の一歩目、出発と印象付けるため、平和の実現に努める方々との連携を模索しました。その道筋で与えられた出会いが、カンナの花を通した平和構築を推進する、「カンナ・プロジェクト」（代表：橘 凛保さん/被爆カンナ*「平和を実現する」心の育成と実践運動）でした。

1945年8月、投下された原爆によって焼土と化した広島で、わずか1か月後に真っ赤に咲いたカンナの花があった、という事実を語り伝えながら、株分けリレーをして平和の実現に取り組まれてこられた橘さん。私たちの企画趣旨を受け止め、つながりの必然を認め、「シンボル・フラワー」として、1500株を提供くださいました。カンナの育成を担っている長野県の須坂市から、カンナの株が長崎に届けられたのが、直前11月20日でした。

礼拝の中では、共同祈願の一人に橘さんも加わりました。そして参列した一人ひとりが球根を手につかんだところで、司式者の前田万葉大司教により祝福を願う祈りがささげられました。カンナのバトンリレーが出発しました。（持ち帰られた球根は、全国各地で植え付けられて、成長した様子の写真も送られてきています。

* https://luther500.wixsite.com/commemo

・継承の可視化に努めていますので、育成状況の写真提供にご協力をお願いします。

同じく、礼拝の中で「折り鳩」の奉納がありました。礼拝出席者だけでなく、祈りに加わってもらう意図で、予め全国の教会、学校、施設等に、折り鳩づくりへの参与を呼びかけました。結果、全国各地から寄せられた多数の折り鳩は、礼拝の中で平和への祈りを込めて献げられました。礼拝終了後、大聖堂を退出する際に参列者へ折り鳩は託されました。「持ち帰って教会楽校で紹介した」、「2018年1月の一致祈祷週間で配布した」、等々、全国多岐に拡がっていると消息を伺っています。

この共同礼拝の様子は、映像制作パートナーの技術力により、ライブで中継しました。当初は、会場内の配慮の範疇で検討していましたが、企画準備の深化に伴って、平和の実現への証言、メッセージの告げ知らせを意図して大聖堂から外に生中継しようとの想いが高じ、予算を組んで実現しました。

現在は記録映像としてYoutubeで公開しており、誰もが見られるようになっています。

*https://www.youtube.com/watch?v=CkLUSYOPZoA

最後に両教会による共催主催となった、『宗教改革500年共同記念』のポスターについて、説明を記します。準備委員会では、最初から最後まで、双方の両教会だけを対象とせずに、広く未来へ向かう想いをどのように表現するか、意見交換を重ねました。

円の中に記した数字は、基本構図となった年号です。1517年、宗教改革のはじまり、1964年の第二バチカン公会議、宗教改革500年となる2017年。

この巡り合せに招かれた両教会が、宗教改革の当事者として祈り、対話し、未来へと歩み出す、という趣旨が手のひらの動作を表現したデザインされています。その決意を目に見えるものとするために、長崎のカトリック浦上教会に集まる。相違を持った私たちを結びつけている共通の認識を『平和を実現する人は幸い』というテーマで表しました。

なお、デザインされたシンボルは、礼拝説教でルーテル教会の総会議長、立山忠浩牧師が言及しましたので、そちらをご覧ください。

2017
1964
1517
Reformation 500th
宗教改革 500 年共同記念
平和を実現する人は幸い
共同主催／日本福音ルーテル教会・日本カトリック司教協議会
2017.11.23（木）カトリック浦上教会にて
10:00 シンポジウム（石居基夫牧師・鶴本勲神父・深町好敏さん・光延一郎神父）
13:00 共同記念礼拝（司式／岡田武夫大司教・大南勝彦牧師、説教／立山忠浩牧師・高見三明大司教）

共同声明

（ルンドにおいてカトリックとルーテルが宗教改革を共同で覚えるに当たって）

『私につながっていなさい。私もあなたがたにつながっている』
（ヨハネによる福音書15章4節）

感謝の心をもって

この共同声明をもってわたしたちは、宗教改革500年を覚える年の始まりに当たり、ルンドの大聖堂において共同の祈りを捧げるこの機会のゆえに、神に喜びをもって感謝していることを表明いたします。カトリックの人々とルーテルの人々との間にもたれた、実り多いエキュメニカルな対話の50年が、わたしたちにとって多くの違いを乗り越える助けとなり、わたしたちの相互理解と信頼を深めてきました。同時にわたしたちは、しばしば苦難や迫害の中で苦しんでいる隣人に対する共同の奉仕をとおして、互いにより近しい者となりました。対話と分かち合った証しをとおして、わたしたちはもはや他人同士ではなくなりました。むしろわたしたちは、わたしたちを結び付けるものが、わたしたちを分かつものよりも大きいことを学んできました。

争いから交わりへと変わっていく

宗教改革によって受けた、霊的、また神学的な賜物に深く感謝しながら、わたしたちはまた、ルーテル教会もカトリック教会も教会の目に見える一致を傷つけてきたことをキリストのみ前でざんげし、悲しみます。神学的違いには偏見と争いとが伴いましたし、宗教は政治的な結果に至る手段となりました。イエス・キリストを信じるわたしたちの共通の信仰と、わたしたちの洗礼は、わたしたちに日毎の悔い改めを求めています。それによってわたしたちは、和解の務めを妨げる歴史的な争いと不一致とを捨て去ることができるのです。過去は変えることができないのですが、何が記憶されるのか、それがどのように記憶されるのかは変えられうることです。わたしたちお互いの見方を曇らせてきた傷と記憶の癒しをわたしたちは祈ります。わたしたちは、過去と現在のすべての憎しみと暴力、特に宗教の名によって言い表されてきたそれらを強く斥けます。今日、わたしたちはすべての争いを捨てるようにとの神のご命令を聴いています。わたしたちは、神が絶えずわたしたちを召しておられる交わりへと向かうように、恵みによって自由にされていることを確認しています。

共に証しすることに向けてのわたしたちの参与

わたしたちの重荷となっている、歴史上のこれらの出来事を乗り越えて進む時、わたしたちは十字架にかかり、挙げられたキリストにおいて見えるものとされている神のいつくしみ深い恵みに応えて、相共に証しすることを堅く誓います。わたしたちが堅く関わりをもつあり方こそが、福音へのわたしたちの証しを形作ることを意識して、完全な一致を得ることからわたしたちを妨げている、まだ残っている妨げを取り除くことを求めて、わたしたちは洗礼に根拠づけられている交わりにおける更なる成長に深く関わります。キリストは、わたしたちがひとつとなって、この世が信じるようになることをお望みです（cf.ヨハネ17.21）。

わたしたちの共同体の多くの会員たちは、十全な一致の具体的な現れとして、ひとつの聖卓で聖餐を受けることを心から願っています。全生活を共にしながら、聖餐の聖卓において神の救いの現臨を分かち合うことができない人々の痛みを経験しています。わたしたちはキリストにあってひとつとなるという人々の霊的な渇きと飢えとに応えるべき、わたしたちの牧会的な共同の責任を認識しています。わたしたちはキリストのからだにおけるこの傷が、癒されることを切に願っています。これは神学的な対話へのわたしたちの関わりを新たにしていくことによってもまた、わたしたちのエキュメカルな努力の目指すところなのです。

わたしたちは神に祈ります。カトリックの者たちとルーテルの者たちが、イエス・キリストの福音を共に証しし、神の救いの働きを受け入れるべく人々を招くようになることを。わたしたちは共に奉仕の務めに立って、特に貧しい人々のために、人間の尊厳と権利とを高め、正義のために働き、あらゆる形の暴力を斥けることにおいて共に奉仕に当たることができるよう、霊の導きと勇気と力とを神に祈ります。尊厳、正義、平和、和解を切に求めているすべての人々に、わたしたちが近づくようにと神は呼び掛けておられます。今は特に、多くの国々や社会で、またキリストにある数え切れないほどの姉妹や兄弟たちに影響を及ぼしている暴力や過激主義を終わらせるよう、わたしたちは声を挙げねばなりません。わたしたちはルーテルやカトリックの人々に、知らない人々を受け入れ、戦いや迫害のゆえに逃れることを強いられた人々に助けの手を差し伸べ、難民や亡命を求める人々の権利を守るよう、共に働くことを強く求めます。

以前に増して一層わたしたちは、この世界におけるわたしたちの共同の奉仕が、開発や飽くことを知らない欲望にさらされている神の創造へと拡張されねばならないことを認識しています。わたしたちは、将来の世代が神の世界をその可能性と美しさのすべてにおいて享受する権利を認めます。わたしたちは、この被造の世界のために愛と責任をもってこれを導くよう、心と思いが変わっていくように祈ります。

キリストにあってひとつ

この絶好の機会に、わたしたちはここに同席し、わたしたちと祈りを共にしている、世界のキリスト教諸教会や交わりを代表しているわたしたちの兄弟姉妹にわたしたちの感謝を申し上げます。争いから交わりへ進もうと取り組むに当たって、わたしたちは、洗礼によってそこに加えられている、キリストのひとつのからだの一部分としてそうしているのです。わたしたちはわたしたちの努力を思い起こさせ、また、わたしたちを励ましてくださるよう、エキュメニカルな同志にお願いします。わたしたちはこの同志に、わたしたちのために祈り、共に歩み、今日表明している、祈りを込めた努力を生き抜くに当たって、わたしたちを支え続けてくださるよう求めます。

世界中のカトリックとルーテルの人々への呼び掛け

わたしたちはすべてのルーテルとカトリックの教会員と教会に、わたしたちの前にある大きな旅を続けることに加わって、大胆であり、創造的であり、喜びをもち、希望をもつよう呼び掛けます。過去の争いよりもむしろ、わたしたちの間における一致という神の賜物が協働を導き、わたしたちの連帯を強めてくださるでしょう。キリストを信じる信仰において近付けられ、互いに耳を傾け合い、わたしたちの関係においてキリストの愛を生きることによって、わたしたち、カトリックとルーテルの者たちは、三位一体の神の力に心を開きましょう。キリストに根ざし、キリストを証しして、すべての人に対する神の限りない愛の信実の使者となるという定めをわたしたちは新たにするのです。

2016年10月31日

（ローマ・カトリック教会）教皇　フランシスコ

（ルーテル世界連盟）　議長　ムニブ・ユナン

来賓挨拶

敬愛する聖職者の皆様、愛する姉妹そして兄弟の皆様

Dr.ティース・グンドラッハ（ドイツ福音主義教会副議長）

皆様のもとでこのような特別なエキュメニカルなお祝いの日に参加することを許され、そして、ドイツ福音主義（プロテスタント）教会、特に評議会と、その代表であるハインリッヒ・ベドフォード＝シュトローム監督からの、心からの祝福のご挨拶を皆様にお伝えできることは、わたしにとって喜びであり名誉なことであります。

「イエス・キリストという既に据えられている土台を無視して、だれもほかの土台を据えることはできません。」（コリントの信徒への手紙一3:11）

この箇所をもって、日本におけるエキュメニカルな道のりに幸いと祝福がありますことを願っております。と申しますのも、今年2017年、ルター都市ヴィッテンベルクにおいて記念祝典を催しました。そこでは、今日の世界におけるプロテスタンティズムの展開についての国際的な展示を行いました。

歴史的な街々を見せるだけにはしたくはありませんでした。というのもの、それでは博物館の展示のようになりすぎてしまうからです。宗教改革のメッセージは博物館にでは無く、生活の中に属するものなのです。神を畏れぬ罪人の義認は、自己救済と自己最適化へと向かう現在の私たちにとってますます重要となりえます。

そのようなわけで、ヴィッテンベルクで私たちは7つのテーマ領域を構成しました。そして95日にわたって、ドイツ中から、ヨーロッパ中から、そして全世界からのゲスト達をお迎えしました。

例えば、「ルターとアヴァンギャルド」という展示がありました。これは、かつて監獄であった場所に設置されました。この元監獄は、ルターの自由の主題の地平を示すものとして多くの方々を魅了することになりました。また、スピリチュアリティの空間というものもありました。これは鏡の道によって構成されていて、訪問者はそこで自分自身と天が映し出されたものを見ることになります。それは意識と内面の道であります。

そして、たくさんの討論会、たくさんのコンサートを催し、たくさんの国際的なゲスト達をお迎えしました。最も印象的であったのは、多くの青年達がヴィッテンベルクを訪れてくれたことでありました。堅信式志願者、ボランティア、ボーイスカウト、さらには「サマースクール」の学生達たちによって、2017年世代とでもいうべきものが生み出されたのでした。ヴィッテンベルクは、宗教改革の歴史的な出発点として、そしてまた宗教改革の今日的な解釈者としてあること、それが私たちの目標でした。

「イエス・キリストという既に据えられている土台を無視して、だれもほかの土台を据えることはできません。」（コリントの信徒への手紙一3:11）

しかしもちろん、1517年にマルティン・ルターによっておそらく95箇条の提題を打ち付けられた場所として有名な城教会があり、そしてまたルターが説教をした教会であり、この祝賀行事の中心として訪問者たちを惹きつける場所としてのヴィッテンベルクの街の教会あるいはマリア教会があります。

そしてこの「街の教会」で、なぜ今回の祝賀行事をわたしたちがこれほどエキュメニカルに方向づけることが出来たのかということを、誰もが皆、知ることになります。

それは、現場で活動する方々の善き意志や、あるいは宗教的に中立な市民社会の教会に対する期待だけなのではありませんでした。またそれは、第二バチカン公会議以来存続してきた、長きに渡るエキュメニカルな理解だけなのでもありませんでした。そうではなく、それは特に霊的な理解、つまり「キリストの祝祭」を私たちは共に形作りうる、ということなのです。

マリア教会（街の教会）には、クラナッハ（子）によって造られた有名な祭壇があります。三幅対のその祭壇は宗教改革者の3つのサクラメントを示しています。すなわち、洗礼、聖餐、そして懺悔（告解）です！

しかし、この三幅対の祭壇の土台部分、プレデッラは、全てのものを支える、その根拠を暗示しています。

この簡素な絵には、十字架につけられた方の磔刑像がその中心に、その左側には説教題に立つマルティン・ルターが、右側には会衆が描かれています。

描かれている空間は簡素で、ほとんど空っぽと言ってよいでしょう。鑑賞する者の集中はこのキリストに留まり、そしてまた、キリストを指し示す、マルティン・ルターの指に留まります。
これは、宗教改革的な絵画言語なのです！

宗教改革それ自体は、キリストを指し示したのであって、新しい教会、新しい信仰告白を指し示したのではありません。キリストは再び信仰の中心に移るべきなのです。というのは、キリストは私たちの救いの唯一の基であり、私たちの確たる信頼の中心なのです。

「イエス・キリストという既に据えられている土台を無視して、だれもほかの土台を据えることはできません。」（コリントの信徒への手紙一　3:11）

職制とサクラメントに関しては、まだ多くの問いが開かれたままになっているかもしれません。しかし、私たちにとって同じく、この十字架のキリストこそが、私たちを負われ、私たちを慰められるのです。

そして洗礼は「共通の絆」であります。なぜならば私たちは、キリストの名によって洗礼を受けたからなのです。

私たちは聖書の神の言葉を同じく聴きます。私たちは隣人に対する責任へと向かうように指示されていることを同じく知っています。
すなわち、わたしたちは、分かたれているよりもむしろ、結びつけられているのです。

神が皆さん全てとそれぞれの教会を祝福し、それぞれの道のりを歩みやすく、また確かなものとしてくださいますように。

来賓挨拶

両教会代表者の皆さま、この集いをご準備くださった皆さま、またお集まりの兄弟姉妹の皆さま

Dr. フランク・ロンゲ（ドイツカトリック司教協議会）

まず私は、立山総会議長様と髙見大司教様に、私がこの特別な日にドイツのカトリック教会の代表としてお招きいただき、皆さまの共同の記念の集いに参加できたことに深く感謝申し上げます。

私たちと祈りにおいて結ばれているドイツ司教協議会会長ラインハルト・マルクス枢機卿からのご挨拶も皆さまにお伝えいたしします。

本日、日本のカトリック教会とルーテル教会は、宗教改革500年を共同で記念いたしました。

このことは当たり前のことではありません。両教会は500年の間分裂し、しばしば敵対し、さらに何度も繰り返えされた相互の暴力の歴史を引きずっています。こうした分裂が始まり、そして急速に紛争状態にまでいたったことを正視せねばならないのは、もとよりドイツをおいて他にありません。

したがって、私は、私たちがドイツで、どのように初めて宗教改革の周年行事を敵対的にではなく、共同のものとして記念したかについて少しお話ししたいと思います。

2008年にプロテスタント側で宗教改革500年記念の10年をかける準備が始まったときには、カトリック側には心配や躊躇がありました。少なからざる人々が、こうした記念はルーテル教会が強調されてカトリックに圧迫を与え、それがエキュメニズム運動に緊張をもたらさないかと懸念しました。

私共カトリックの側としても、初めは、自分たちが宗教改革の悲劇的な結果とそれに対するカトリックの応答をしっかり見ないで、ルーテルの兄弟姉妹とこの記念の年の喜びをいかに分かち合うことができるかよくわかりませんでした。

政治的な利害と結びついた教会の分裂、またそれがもたらした暴力は、喜ぶ理由にはなり得ないという声が、何度も聞かれました。

今日、この初期段階を平静に振り返ることができます。ドイツの司教協議会と福音主義教会は対話をもち、宗教改革の宗教的な刺激を共同で見つめる良い道を見出しました。両教会は、この記念年を“キリストの祭”を共に祝う機会とすることに同意しました。

これが可能となったのは、ドイツと世界の教会レベルで何十年にもわたって成長してきた、そして特に最近では2013年に出版された、カトリックとルーテルの対話文書『争いから交わりへ』にみられた優れたエキュメニカルな関係によることでした。

私たちがイエス・キリストに眼差しを向け、私たちの共通の信仰の中心と見なすよう努めるこの“キリストの祭り”は、さまざまの共同体での企画と並んで、国のレベルにおいても一連の行事が催されました。

具体的に2つの例を簡単に紹介したいと思います。

まずドイツ司教協議会とドイツの福音主義教会評議会の代表である司教たちと評議員たちは、2016年秋に、聖地に行ってキリスト教の起源の場所に巡る巡礼をしました。

この巡礼は、宗教改革記念年に入る以前に行われましたが、教会指導者のレベルでの信頼の雰囲気をつくるのに極めて有意義な旅となりました。

そこで行われたプログラムは、エキュメニカルな礼拝のやり方、朝と夕方の祈り、霊的な講話の際に選ばれる聖書の箇所、聖書による分かち合い、共同の歌と祈りなどでした。そこで、結局、私たちを結んでいるものが喜んで祝われました。それぞれの教派で実施されている規則を尊重しながら、聖餐式も行われました。

そこには、うまく結び合わせることができることとともに、これから克服していかねばならぬことですが、苦痛も経験せねばならぬ分離があることも想像していただけるでしょうか。

もう一つの例は、この“キリストの祭”の頂点とも言える、ヒルデスハイムのミカエル教会で2017年3月11日に催された赦しと和解の共同礼拝です。この模様は、テレビの公共放送でも放映されました。

そこには、カトリックから「キリスト教一致推進協議会」長官のクルト・コッホ枢機卿、世界教会評議会（WCC）事務総長のオーラフ・フィクセ・トゥヴェイト博士、ヨアヒム・ガウクドイツ連邦大統領とアンゲラ・メルケル首相など、高位の政治家たちの代表も参加しておりました。

この公共的な場において、ラインハルト・マルクス枢機卿とドイツ福音主義教会議長のハインリッヒ・ベットフォード・シュトローム博士は、神の前でお互いに罪を告白し、神の赦しを祈りました。とりわけ、共同礼拝において語られたエキュメニズムのさらなる進展への自らの義務は、2017年の後にも続く約束としてとらえられました。

グンドラッハ博士と私が、今日の共同礼拝で共に唱えた祈りは、このヒルデスハイムでの礼拝のハイライトでした。

ヒルデスハイムでのもう一つの頂点は、礼拝参列者を深く感動させた象徴的なしるしの行為でした。

すなわち、罪と分裂から和解へいたる道が、以下のようなシンボルで示されました。最初は、教会の中央通路に障壁のような高さ2メートル以上の金属のオブジェがありました。それを若い人のグループが立ち上げ、三次元の十字架を示しました。

以上が、ドイツにおける共通の“キリストの祭”を形作った最も重要な2つの試みでした。

宗教改革2017の諸行事は、これまでのところ、すばらしくユニークな仕方でエキュメニカルに実施されています。それは、ドイツでは全く明らかです。ドイツは宗教改革が始まった国ですし、そうであるからなおさら、目に見える一致をフルに回復する特別な責任も感じています。

私たちドイツの両教会は今年、これまでよりももっと互いに近くなりました。それ以前の苛立ちや厄介なこと

の多くは、ヒルデスハイムにおける悔い改めと和解の共同礼拝で克服されました。

もちろん、これによって神学的な相違が解決されたわけではありません。しかしながら、この追い風により、まだ解決されていない問題が、教会を分割させ続ける性格をもっているのかどうか調べ、検証していくことが容易になったことは確かです。

私たちは、「和解した相違」において、完全に目に見える一致へと向かう途上にあります。この2017年がもたらしたエキュメニカルな推進力を利用することは、私たちが今直面している課題です。

ドイツにおけるその期待は、まことに大きなものです。この期待が私たちの教会の内に存在するだけでなく、外からも私たちにもたらされていることの例は、次の小さな出来事に見ることができます。

2017年10月31日、すなわち宗教改革500年の日に、ヴィッテンベルク城教会において、政府代表者の参列を得て、大きなプロテスタントの礼拝がささげられましたが、そこでドイツ福音主義教会のベットフォード・シュトローム議長とマルクス枢機卿が、共に、ドイツ連邦大統領に、ヒルデスハイムにおける和解の十字架のミニチュアをお渡ししました。

まわりの人々がこれに反応したのは一目瞭然でした。それは十字架が大統領に渡されたからではなく、エキュメニカルな一致のしるしが催されたことのゆえに、自発的に、教会の代表者ではない人々の間からも大きな拍手が巻き起こりました。

もちろん、関係者たちも、キリスト者の間の一致を望みました。私たちは共にキリストを信ずるに値する方として告げ知らせることができます。和解しながら私たちは世界の模範と成り得ます。平和のうちに、私たちは世界の平和に貢献することができます。

それゆえ、グルンドラッハ博士と私は、尊敬する髙見大司教様と立山総会議議長様に、結びのしるしとして、同じ和解の十字架を差し上げたいと存じます。

分け隔ての障壁から十字架を立てることは、救いのしるしです。そしてそれは一次元的ではなく、視角が異なってはいても、同じ一つの十字架を示しています。最終的に、これがすべての方角に到達し、座標系のように私たちを助けることができるのです。

開会

白川道生
（日本福音ルーテル教会事務局長、ルーテル／ローマ・カトリック共同委員会委員）

ただ今より、日本福音ルーテル教会、日本カトリック司教協議会、宗教改革500年（共同）記念プログラムを開催いたします。
本日の全体のテーマは、「平和を実現する人は幸い」というテーマを掲げております。開会に際して、まず祈りをもって始めて参ります。

主なる神様、私たちは今日、この浦上教会に集められました。あなたの導きによってこの時が与えられていますことを感謝いたします。この時間とここに連なる人々をあなたの平和で満たしてください。そして、私たちに一つの祈りをお与え下さい。平和の思いを心に宿して共に歩みだす時となりますように、このすべての時を祝福してください。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン

それでは、午前中は、シンポジウムのプログラムを行って参ります。
始めにシンポジストの方のご紹介をいたします。シンポジストの方々、どうぞ前の方にお進みください。
シンポジストの方をご紹介いたします。

始めに、カトリック中町教会司祭、長崎教区エキュメニズム諸宗教委員会委員長であられます、橋本勲（はしもと いさお）神父です。

次に、日本福音ルーテル教会牧師、日本ルーテル神学校校長であられる、石居基夫（いしい もとお）牧師です。

そして、イエズス会司祭、上智大学教授であられます、光延一郎（みつのぶ いちろう）神父です。

どうぞお掛けください。そして、この会のシンポジウムの司会をいたします、小泉基（こいずみ もとい）日本福音ルーテル教会牧師、九州教区教区長であられます。
では、よろしくお願いいたします。

小泉　基

それでは、早速私たちのプログラムを始めて参りたいと思います。始めに、シンポジストの皆さんにご発言いただきます前に、今回のシンポジウムの意義について、短くまとめましたショートムービーがありますので、そちらの方を皆さんにご覧いただきたいと思います。

宗教改革500年共同記念イントロダクションムービー
https://youtu.be/OatmnvGSb0U

皆様に短いビデオを見ていただきました。本日のシンポジウムのテーマは、「平和を実現する人は幸い」というテーマであります。本日はまず、お三方のパネリストの方々に、それぞれ発題を伺いまして、もし共通するものが、見えてくるものがありましたら、私の方から少しお伺いして、その後、お互いの発題を受けての、パネリストの方々の自由な討論というものに入って参りたいと思います。

頭はお尻の上にあるというふうに申します。今日私たちは、全国からこの長崎、浦上に集っております。この、浦上の教会の椅子の上に座って、この地で私たちは、平和を実現するということを考えて参りたいということでありまして、本日は、まず最初に、この長崎教区から橋本勲神父様にお話をお伺いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

宗教改革500年共同記念シンポジウム

平和を実現する人は幸い

- 司　会 -

小泉 基 牧師
（日本福音ルーテル教会牧師、
日本福音ルーテル教会九州教区長）

- シンポジスト -

橋本 勲 神父
（カトリック中町教会主任司祭）

石居基夫牧師
（日本福音ルーテル教会牧師、
ルーテル／ローマ・カトリック共同委員会委員）

光延一郎神父
（イエズス会司祭、
ルーテル／ローマ・カトリック共同委員会委員）

シンポジスト発題　1　「長崎からの声ー苦難の歴史を踏まえてー」

橋本 勲神父（カトリック中町教会主任司祭）

こんにちは皆さん。最初にご指名いただきまして恐縮しております。長崎駅前の町中の中町の橋本と申します。よろしくどうぞ。実は、過ぎた19日の日曜日、私の教会ではバザーがあったんですが、かなりの収益を上げました。ただ、失敗したと思っているのは、免罪符を売らなかったっていうのが、これは、返す返すも、ちょっと失敗だな、もう少し稼げたのに、と思っております。その代わりと言ったらなんですが、昨夜、水曜日のことなんですが、テゼ共同体のテゼの集いというものをうちの教会でやりました。これはご存知の通り、テゼ共同体、いわゆるキリスト教のいろんな宗派を超えた共同体を作って、まさにエキュメニズムの実践そのものであるわけでありまして、エキュメニズム、和解というものがどうしたらいいのかわからなくなったらここに行けば大体わかると、そういう所でありまして、年間、若者を中心に、十何万人の方々が訪れている、一大巡礼地になっているということは皆さんご承知かと思います。そういうイベントをいたしましたので、免罪符は十分取り返したかなというふうに思っております。

さて、私に与えられましたテーマは、苦難の歴史を踏まえた上での、長崎からの声を届けなさい、とこういうことなのであります。長崎の声を届けたいのですが、私自身の長崎体験というものをちょっとお話ししたほうが、少し理解が進むのかなというふうに思っております。1969年でありますが、二大イベントが世界で行われました。それは人類が他の天体に行ったという月着陸をしたという事件と、もう一つは、この私が神父になったという、重大事件でございましたが、卒業する時にですね、優秀な成績でと申し上げたいのですが、残念ながらそうではなかったわけで、優秀な成績だと言ったとしても、ここにおられるのでみんな分かってしまうから、そうでなかったわけですよ。卒業する時に、私の霊的指導司祭がおられまして、「あんた、神父になってこれから司牧をやるんだけれども、これまで習ったことは何の役にも立たんから捨てなさい。」と言われた。私は曲がりなりにも一応卒業させていただいて、全人類の救済のために、今から出かけようとしているのに、今までは役に立たんから捨てろ、と言われましてね、この指導者は何を言っているのかなと思ったのですが、現場に行きまして、3年と続きませんでした。ネタ切れ、品切れ、全部切れてしまった。こんな風にお話をしますと、もう生理的に向こうの壁に突き当たって、声がむなしく返ってくるわけです。ほとんど通じていないということが分かる。これは非常に

苦しい、むなしさのむなしさといいますかね。その時に青年担当をさせられまして、毎晩毎晩のように靴をすり減らしながら、青年たちと、青年たちの仲間を求めて歩いていたわけです。

そうすると、青二才、まだ20代でありますが、この私を「いらっしゃいませ」といって、信徒の皆さんが、家を開けてくれるわけです。若者がそこに行って、座敷に通してくれるわけです。そしてもてなしてくれるわけです。そしていろんな話し合いをしていく。そういう体験をして、あー、この人たちは確かに神学の体系は知らないと思うけれども、コアを知っている。中心を知っている。核を知っている。イエス・キリストをとらえている。こういう思いに圧倒的にかられまして、それから、少しずつ少しずつ、これはちょっと考え直さなければいけないということで、飽きもせず48年間この商売を続けておりますが、その間に偉大な先輩が私に言ったんです。(私の)書き物を見たらしいんですよ。そしたら「お前はプロテスタントになっとるやっかね」と言われた。プロテスタント(ということが)、どういう意味かよくわからなかったんですが、どうもあまりいい意味では言われなかったようですね。しかし、今は、実はこれは勲章じゃないかと思っております。事と次第では、この話が終わってから宗旨替えをしなければいけないかなとも思っておるわけですが、まあ、なかなかこのテーマに入っていきませんけれども、実はそのことが、申し上げたいわけでありまして。いわゆるキリスト教のコア、一番中心、イエス・キリスト体験、これは復活体験であるわけですけれども、ここをきちっとつかまない、実は、何が問題であったか、「捨てなさい」と言われたのは、そこに繋がらないものは捨てよ、こういうことだったんだなということを、圧倒的に知らされたわけでありまして、そこが繋がらないと、通じもしないし、力も発揮しない。そういうことが、日本のキリシタン史においても、やはり通底として、そこに脈々として続いているということを実は申し上げたいわけであります。これが結論であります。これでサヨナラしたいんですが、もうちょっと時間つぶしをさせていただきます。

ご存知の通り、長崎のキリスト者の歴史というのは迫害と潜伏と殉教の歴史であるわけであります。この歴史というのは、歴史の表面に「崩れ」という言葉で登場したわけでありまして、この「崩れ」という言葉をキーワードとして、お話し申し上げてみたいと思います。

1793年の一番崩れから、1867年の四番崩れまで、有名な四番崩れでありますが、番号を付けられて「崩れ」が繰り返されていった。何回も何回も大量検挙事件、集落のですね、これを「崩れ」という言葉で表現されているわけであります。その「崩れ」というのは他にもいろいろあった。木場(こば)崩れ、郡崩れ、五島崩れ、濃

尾崩れ、と崩れていくわけでありますが、この浦上の「崩れ」が四番崩れ、執拗に繰り返されていった、「崩れ」の王道みたいなものがそこに通っているわけであります。そうするとこれは摂理的に、よく言われる五番崩れとしての原爆、そして今日の結論に申し上げたいと思っているのは、いわゆる第二バチカン公会議、この六番崩れで、崩れるべく、ものは崩していくという、そして、そこから復活していくというふうに繋がっていけばいいなと思うわけであります。

その「崩れ」という言葉が最初に使われたのは、権力側でもなく、自然に言われるようになったのでもなくて、浦川和三郎司教さんが最初に使ったというふうに、識者によれば、言われておりまして、1915（大正4）年でありますが、『日本に於ける公教會の復活　前篇』という本に、実は最初に表れてくる言葉だそうであります。一般の権力側が言っている言葉というのは、異宗一件とか、浦上異宗徒事件というような言葉を使っている。「崩れ」という言葉は使われていないというわけであります。もちろん司教さんでありキリスト者でありますから、浦川和三郎師は、この「崩れ」という言葉の背後に、当然のこととして、究極の「崩れ」であるイエス・キリストの死というものをイメージしていたのであろうということは当然のことであろうと思います。とすると、「崩れ」という時点の中で、復活、死と復活は一体でありますから、そういう信仰の一番の核、コアというものに触れた言葉であろうかと思います。1643年ですね、小西行長、この有名な武将の孫と言われるマンショ小西神父の殉教によりまして、日本には一人の司祭も宣教師もいなくなったということになっております。

しかし、この、世界に類例を見ないほどの迫害と潜伏の歴史に分け入って、この司教さんは、たぶん、司教として、信仰者として、確かに目に見える牧者はいなくなったんだけれども、しかし、ただ一人の、唯一の、本物の牧師、宣教者が居残った。キリシタンたちのそば近くに寄り添い続けたのだということを見ていたんではないかと思います。それは言うまでもなく復活者キリストでありまして、この苦難の時に、これはもう目に見える牧者はいなくなったが、もうこれはそういう人たちに任せてはおれない、私が行くよ、という感じで、キリスト自身がそこに寄り添った。これば望むべくもなく、外側からの外圧なんだけれども、それがあればこそ、逆に、一点絞り、イエス・キリストへの一点絞りという歴史現象が起こっていったのではないか。そして、勢い、信徒の皆さんの中も、人工添加物というものが、いわゆるキリスト教にはくっついてくるわけなんですが、そういうものが、どんどんどんどん外圧であるがゆえに、はじかれていき、イエス・キリスト一点、復活体験一点、ここに絞り込まれていった。一点絞り、これは今の私たちの教会の言葉に直しますと、いわゆる福音「化」という言葉につながるんだろうと思います。福音化というのは、イエス・キリストへの一点絞り、復活体験一点絞り、そこにコアを持っていくということだと思いますね。ビール

は一番搾りですが、キリスト教はキリスト一点絞り、これは一つ覚えとして覚えておいていいんじゃないでしょうか。これにつながると力を発揮するし、ここから中心がぼけますと大体おかしなことになるんです。500年前ちょっとそういうふうな現象が起こったんじゃないんでしょうか。それでいわゆる「のみ」を、カトリックは「か」ですけど、福音化という「か」、「か」が発生しますと力が湧いてくるわけです。ですから、「か」が取りつかなければいけない。「か」が取りつく、だから、カトリック、とこういうわけなんです。ただ、プロテスタントは「か」じゃないんですね、「のみ」なんですね。「のみ」というのは、聖書のみというのみ。のみが発生して同じように、これはやはり福音化、この一点絞りが期せずして行われた、そしてそれを主張していったということになって、ようやく500年経ちまして、同じ路線に入ったということではないか、というふうに思うわけであります。そういうわけで、このコアへの絞りというものが、キリシタンの歴史の中に、好むと好まざるとに限らず、この「崩れ」という言葉を以って、そこに行われていったんだと。歴史の深層の中にずっとこれが通っているということを申し上げてみたいわけであります。

さて、次に、四番崩れから五番崩れに入っていかなくてはならないと思うんですが、歴史研究の中で、被爆体験を五番崩れというふうに言われたという記録などはないわけですけれども、一つだけ、永見津平（ながみしんぺい）という方、これはペンネームですけれども、永見勝重（ながみかつしげ）という方、NBC放送のアナウンサーであり、プロデューサーであった方なんですが、この方が歴史ドキュメンタリー風に原爆を取り上げているんですが、そのタイトルに「五番崩れ」というタイトルを付けております、この本なんであります。で、原爆ものというのはだいたい永井博士ものですから、あんまり知られていないかと思うのですが、そういう意味で、非常に貴重なものでもあると思っております。そしてその中身が、文学評論家の言葉によりますと、「長崎を背景にした小説だが、単なる被爆体験の悲惨なルポルタージュ小説でもなければ、原爆許すまじの怒号小説でもない。この小説の絶対的魅力は、原爆はキリスト教の側から見ないとその本質がつかめない、というこの作家の信念の形姿化（つまり姿かたちにしたもの）だ」と評されているものなのです。確かに読んでみると、すごく詳しい取材に基づいた、単なるフィクションではない、ということが分かるわけであります。特に被爆の年、昭和20(1945)年ですが、そのクリスマス、がれきの中から蘇った、いわゆる長崎の鐘を放送、録音したときのアナウンスが書かれてあるんですが、「浦上キリシタンが長い弾圧をくぐり抜け、地下潜伏から復活したのが、元治2（1865）年、四番崩れから復活したのが明治6（1873）年、そして、原爆による五番崩れから、昭和20年12月24日クリスマスイブを期

して、復活したのでした。丸太の櫓の下で鐘をついた神父も、それを聞いた信徒も、その日を浦上パスカの日として、浦上復活の日として、深く心に留めたということです。」という、キリストの復活を背景にした、被爆からの立ち上がりというものを見ている。信徒ではなかったんですが、そういうことをそういう視点から見ているということで、非常に印象深いということなんであります。当時1万2千人の信徒がおられた。そのうちの3分の2以上、8500名の方々が被爆し、一瞬にして命を失ったわけであります。かつてのキリシタンの迫害などは、数においては、それこそ比較にならない程の、言ってみれば、そういう殉教者たちがここに現れた。そういう意味では、これは世界の、崩れの王道、崩れの本拠地であり、復活の現場、そこから出発すべきものである、召された場所であるということが言えるのだと思います。

時間がありませんので途中端折りまして、次に申し上げていきますが、六番崩れとして公会議を位置付けたいと思うのは、やはりキリスト一点絞り、パウロさんが言っていますように、私は十字架のキリスト以外は何も知るまいと心に決めた。キリストにおいて天と地、全てのものが一つとなる、平和の視点と言うものが記されているわけでありますが、これを、私たちが今、目指していく必要があるというふうに思います。主の平和と言われる、私たちが与えられる、或いは目指さなければ（ならない）平和っていうのは主の平和でありまして、これは世が与えるようなものではないと言われておりますが、具体的にどういうふうに発露していくのか、私は十字架の形をしているんだと思います、この平和。天と地に繋がり、右と左に手を伸ばしていく。そして往々にして私たちは、自分の意見、自分のやり方と言うものに立てこもりまして、右の考えは右だけに立てこもって左を切り離していくということがあって、決して十字架が出来上がらないというようなことが起こるんだと思います。今、プロテストしないプロテスタント、或いはプロテストされないのに未だ護教的で、専守防衛に固執している教会の姿というものが、まだちらほら見えるのではないかと思いますね。専守防衛に走る人や立てこもる人じゃないんだけど、なかなかそこから出ていかないということがあるんじゃないんでしょうか。そこでやはり、一番人間になじむ形、世界になじむ形、鳥だって手を広げれば十字架の形になるわけでありますから。人間も手を広げるだけで形になるわけですから。片方では飛べない、鳥に聞いたことはないんですが、右の翼だけでは飛べないんだと思いますね。飛行機も飛べないそうです。片方のエンジンでは飛べるけど、翼がなくなったら無理だそうです、一方では。両方いるんです。右の翼と左の翼、右翼と左翼の両方がいる。ここに徹底的に関わりながら、しかも自分は真ん中におり、キリスト教的中道、というのは中心道でありまして、ものの本質に迫り、骨格に迫る。核という

のはイエス・キリスト一点でありまして、そこにどう進んでいくか、迫っていくか、一点絞り、求心力をどれくらい持つか。求心力は同時に遠心力を生むわけでありますから、そういう平和というものを作り上げていく必要があろうかというふうに思うわけであります。

ちょっと時間延長になりますか、まだいいですか？

いや、一人どうしても紹介しなきゃならない。いや二人になるんですが。実はちょっと遅れましたけれど、私は本当は代理でありまして、原爆を実際に体験されて、いわゆる崩れの歴史の子孫でもあります方が、ここに登壇する予定だったのですが、なにぶんにも高齢で来られなくなりました。その方は平和推進協会というところに属しておりまして、前方に並べている被爆写真を収集いたしまして、日本のみならず世界にこれをもって、原爆の非人道性を訴えながら活躍している方なんであります。深堀好敏（ふかほりよしとし）さんという方であります。今朝も電話したんですが、どうしてもここには来れない、皆さんによろしくということであります。ぜひ自分は、当時教え方さんと言われるカテキスタから勉強していた頃、ルターというのは、ユダと一緒ぞと言われていた。近くのプロテスタント教会の日曜学校には行くな、と言われた。それがこうして一緒に礼拝をするという時代になって、非常に感動している。ぜひ皆さんに伝えてくれ、と言われております。

もう一人の方は、ご存知の本島　等（もとじまひとし）という市長さんでございましたが、私の教会の信徒でありましたが、この方が言ったのはまさに十字架型の平和でございまして、被害の歴史というのもあるけれども、加害の歴史もある、ここを見なきゃいけない。両方がやはり両方に繋がり、違うのだけれども一つだ、或いは、違うからこそ一つだと、徹底的に加害と被害に関わりつつ、しかも中心に自分自身は位置取っていく。自分は全然変わってはいないのに、みんな右の方に行くので、自分は左だ左だと言われるんだと言って、涙ながらに訴えておられましたが、まさにこの方は福音化を見事に果たされて、十字架型の平和をこの世界に主張されていったのだと思います。そういう形の平和を立場を異にするルーテル福音教会、カトリック教会、色々な諸派というものが同時に求めていくということが出来る、そして今始められているように続けられていくならば、そのプロセスそのものが、平和づくりということになっていくのではないかと思います。

少々長くなりましたが、ここらで締めくくらせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。

橋本 勲 神父

（小泉基牧師）

橋本神父様、ありがとうございました。本日私たちは、本来ならこの場所に、今年の長崎市平和式典の被爆者代表で、メッセージも語られました、この浦上教会の信徒さんであられます深堀好敏（ふかほりよしとし）さんをお招きして、お声をいただきたいと願っておりましたが、今お話ありましたように、少しここに上るまでに体調が整わないということで、今日はご欠席であります。皆さんどうぞ、覚えてお祈りいただければと思います。

橋本神父様からは、この長崎、特に浦上を中心とする潜伏キリシタンへの弾圧の歴史、そして、この浦上を中心とする長崎の被爆者の方々の思い、そして、それから更に発展して、第二バチカン公会議、カトリック教会にとって非常に大きい決断をする会議であったというふうに認識しておりますけれども、この公会議、これらを通してですね、それらは、特に長崎の教会の歴史にとっての試練の経験でもありましたけれども、試練の中から、キリストへの集中が起こってきたのではないか、キリスト一番搾りが起こってきたのではないか。キリスト一点絞りが起こってきたのだと。ルター派ですので、ちょっとビールに寄っているかもしれませんが(笑)。そしてそこから、本当の十字架と復活の出来事が起こってくる、それを「崩れ」という言葉で表現してくださった、そういう発題であったかと思います。

続きまして、今の発題を受けて、ルーテル教会の、神学校の校長でもあります、石居基夫先生から、今日は「罪について－それにも拘わらずをいただく福音」としてご発題いただきます。よろしくお願いいたします。

シンポジスト発題2　「罪について」～それにも拘らずをいただく福音

石居基夫牧師（日本福音ルーテル教会牧師）

よろしくお願いいたします。おはようございます。こうしてこの会堂にこんなに大勢の方が集い、集まって下さって、ともにこの時を過ごすことができますことを、本当に心から嬉しく思っていますし、心に熱いものが溢れてくる思いです。橋本先生は、今、崩れということの中で、キリスト純化、一点絞りが起こってくるということをおっしゃられましたが、あの1945年の時にこの会堂も崩れてしまっていたんですよね。その中でしかし、信仰が守られて、今日まで大きなキリストのはたらきにあずかりながら、祈りを続けてきたこと、そのことに、私どもが、その場所に集められていることを本当に嬉しく思うことであります。崩れというのはですね、しかし、試練ということと言ってもいいと思いますが、試練は自然に起こってくることももちろんあるんですが、私ども自身が試練を人に課していくような、そうした問題を持っているということもまた、真実でしょう。こうして平和を実現するということを私たちは、キリストから命じられていますし、私どもが教えられていることなので、それは大事だと思うわけですけれど、でも、自らその平和を壊していってしまうものでもあるのだということを改めて、自らを省みさせられるようなことです。これが私たち自身の中にある罪の問題だというふうに思います。罪ということで言ってしまうと、何か一般化してしまうような感じですけれど、具体的な形をいつでも持っていますね。心の中にあるだけではなくて、それは、具体的な形になっている。そのことに対して神様はいつも戒めを与えられて、み心に戻ってくるようにと教えて下さったことでしょう。旧約聖書の中にあるたくさんの預言者の声は、神様からいただいた声ですけれど、そこには神様の平和に立ち戻るようにと呼びかける声があります。それは、逆に言えば、人間たちの中で、支配する者、支配される者、力ある者、力ない者、そういう中で抑圧される者があったり、苦しめられる者があったり、迫害される者があったり、殺されてしまう者があったり、そういう悲しみや苦しみを神様はどうしても放っておけない。だから人々に、預言者を通して語りかけられたと思います。平和があるように、正義と公平がそこに取り戻されるようにと、そう呼びかけて下さったし、そして神様ご自身が、あの出エジプトの出来事にあったように私たちに、具体的に働きかけて下さって、私たちに主の救いを経験させて下さってきたということだと思います。もともと私たち人間は、この神様のみ心の中で、互いに助け合うように、ふさわしい助け手として、ともどもに存在するようにと創造されたものであります。私たちは互いに助け合う者として、お互いに、これぞ私の骨の骨、肉の肉と呼

び合うくらいに、一つのものとして生きていく、そういうものだったと思うのです。けれど聖書が示しているのは、そんなはずだった私たちが、神様のみ心から離れて行ってしまう。それが自分勝手な生き方を生み出してしまったことになりましたし、神様から離れることによって、人間同士のお互いの助け合うあり方というものを失ってしまって、そして自らを恥と思って、お互いに身を隠すようになって、ありのままをさらすことを恐れるようになってしまって、そうして互いの間に壁を作ってしまい、そして、争いや憎しみを表すものとなっている。

創世記第三章の中の堕罪の物語は、私たちにそうした人間の姿を本当にありのまま示して下さっていると思うのですね。そしてそれに続く第四章、カインとアベルの物語。本来だったら一番助け合わなければならない兄弟が、助け合うことよりも憎しみをそこの間に生み出すことになってしまって、そして殺してしまうということの現実がある。助け合うべきものが殺し合っている。そうした人間の深い罪の問題を、聖書は私たちにその一番最初のところに示しているわけですね。ルターという人が宗教改革を起こして、それが分裂になり、そして16世紀には争いになり、戦争になっていったという歴史を私たちは知っているのです。それがどんなに大事なものだということを主張するものであっても、その時に、お互いにお互いを認め合ったり、許しあったりしていくところにまで、しっかりとその道を歩むことがかなわなければ、どんなにそこに真理があっても、人間同士の悲しい出来事が起こってしまったのだというふうに思います。ルターは自分自身の中にそうした罪の問題を深く深くみていることの中で、おそらく宗教改革の真理ということを知ったはずなのですけれど、でも、その歴史の中で必ずしもルターの意図した福音ということに留まることよりも、むしろ争いや分裂ということの方が私たちに大きな傷を残してしまったのかもしれません。でも、そうであればこそ、私たちは、ルターも大事にし、また、それぞれの苦難の歴史、崩れの中で、キリストの一点絞り、私たちが本来生かされていくべき福音、神のみ心に立ち返ること、そのことを私たちは、もう一度自らのうちに取り戻していかなければいけない。宗教改革は16世紀の問題ではなくて、私たちが今日生きていることの中で、自分自身のうちにもう一度罪の問題をしっかりと見つめながら、神様のみ心から離れていく自分自身を見つめ、そこから悔い改めて、キリストに私たちが本当に委ねて、新しく生きていくっていうことを始めなければならないのだと、それこそが宗教改革を覚えていくということの意味なのだというふうに思うのです。特にこうして平和の問題ということに、私たちが現代の社会の中で、今私たちの身の回りの中で、ニュースを見ていても、まあほんとに小さなところから、世界規模の大きなところまで、平和を生み出す力がたくさんあること

を私たちは知っていますし、私たち自身、そのことで戦々恐々としながら、恐れを抱いているかもしれませんが、その中で私たち自身が本当に自分を見直していかなければならないのかなぁということを思うわけです。まあ、長崎に今回こうして集まるということが決まってから、この浦上にも何度か足を運ばせていただきましたが、実は本当に恥ずかしい事なんですけれど、もちろん日本の歴史の中での広島のことも長崎のこともちゃんと勉強したはずなんです、自分。だけれど、長崎のことどれだけ知っているかなぁって思うと、本当に心もとないものでした。だから少しでも、その長崎のあの時のこと、この時のことを知ろうと思って、少し物を読むことがありました。

林京子（はやしきょうこ）さんという方が、『祭りの場』という著作を書いていらっしゃって、ご自身の被爆の体験をそこに記されています。まあほんとに、ほんとにこの浦上の一帯がどんな状況であったかということを改めて、身につまされるように、その書かれたものの中で思わされたことでしたが、その一番最初のところにですね、こんな文章が書いてあったんです。それは、アメリカの原子物理学者たちが、東大の嵯峨根教授に送った書簡の一文が紹介されたんです。ここにも、そこに抜粋して書かせていただいたんですが、そのアメリカの物理学者が送ってきた一文、これは、広島での原爆が落とされたすぐ後に送られてきたものだそうです。

「日本国が直ちに降伏しなければ、その時は原爆の雨が、怒りのうちにますます激しくなるであろう。」という忠告の文書ですね。研究者としてもちろん嵯峨根先生はきっと、アメリカの物理学者たちとも交流が長くあったのでしょう。で、アメリカの物理学者がそのことを、まあ警告をするように、忠告をするように嵯峨根先生に送られたんですね。それを受け取っている、そのことを紹介しながら、林京子さんはですね、これを、この書簡が送られたということを見て、もちろんこれは、長崎の被爆のずっと後でその文書が送られていたということをもちろん知るわけですけれども。「原爆の雨が怒りのうちにますます激しく私の友を殺した。8月9日の浦上が目に浮かんでくる。当然の行為として、もちろん忠告ということですが、当然の行為として書いた三学者を、或いは書かせた米国を、神のみ子だから怒れるのだなと敬服する」、とそう記しています。神の国、信仰の国、キリスト教の国としてのアメリカを揶揄するような気持ちだったでしょうか。どうしてなんだろうって問うような気持ちだったでしょうか。神のみ子だから怒れるんだって。そういう怒りの中で、私たちの友が命を奪われていったのかって、一体それどういうことなの、という問いだと思います。この文章に私、昨年出会った時に、キリスト者だから平和をという、私たち自身の思いは当然なのかもしれないけれど、その当然だという思いの中で、私たち

が驕り高ぶって、キリスト者は素晴らしいとか、宗教は素晴らしいとかって決して言えない。同じ人間として罪にまみれていて、自分勝手な思いの中で、神様さえそれを私たちの思いの中に持ち出して利用しようとする。そういう私たち自身の深い、根深い罪があるのだということを私自身知らされた思いでありました。だからまず、ここに集って平和のために祈り、この礼拝からそれぞれに派遣されていこうっていう時には、私たち自身がまず、謙虚にされる必要があるんだってそんなふうに思いました。

浦上のこの崩れ、キリシタンの四番崩れに至るまでの崩れであって、それはこの世の権力が、政治的にも宗教的にも人々を抑圧したり支配してきた、そういう歴史の一つですよね。その中でそういう抑圧や弾圧、支配ということの中で、人々の思いや大事にする祈りや命そのものが、奪われてきた。カトリック教会の歴史にも、もちろんそうした歴史はあったこと。ルーテル教会の中にもそうしたことがあったこと。ルター自身の中にも、例えば農民戦争のことや、ユダヤ人やトルコ人に対する発言などにも、歴史的な限界の中で、自分たちは素晴らしいけど、あれはダメだって決めつけていく、そういう驕りや罪があったこと、私たちは今だから知っている。でもそれは私たち自身にも同じことですよね。私たちがどういう思いでいるのか。私たちはまずその歴史的限界性を深く、自分の中にも見出して、そして、この歴史に責任を持つこと、自分自身の罪を告白しながら、平和を求めていくという告白性が必要なのだということを心に置いています。

私どもルーテル教会の先輩牧師なんですが、岡正治（おかまさはる）牧師が、この長崎で牧会をし、そして市会議員にもなられて働かれた先生です。この先生は、長崎での被爆ということを被害者として、もちろん考えなければならないことは、重々その通り。けれどそのことと共に、いやそのこと以上に、こうした長崎においても、朝鮮、韓国の人々を強制的に連れてきて、ここで強制労働させてきた歴史があったじゃないか。そして被爆の中でも、在日の方々も一緒に被爆したということを私たちは、どんな風に重く等しく受け止めて来れたのだろうか。そんなことを、加害者としての自分たちを知らなければならないと、たくさんそうした発言をされて、自分たちの罪性ということ、罪の現実を見ながら、そのことの責任を自らに問いながら、平和を祈り求めていくということを訴えられたことを改めて思い起こしています。

第二次世界大戦の、あの太平洋戦争、あるいは、中国あるいは大陸に対する私

たちの戦争の時に、教会もまた戦争協力へと駆り立てられていった、そのことを私たち自身も深く心に留めて、まず、自分自身から、そのことに打ち砕かれながら、しかしそうであればこそ、キリストへの福音ということにしっかりと立っていくべきなのだ、ということを改めて思うわけです。

原子力ということの中で、原爆は、これは本当に私たちの、この苦難をこの地においてこそ知ることですけれど、戦後の歩みの中で、しかし同じ原子力は平和利用という、おいしそうな果実として、私たちの前に現れて、それに私たちは手を伸ばし、もいで、一口二口食べてきたのでないだろうか。そのことが私たちをしかし、どんなに苦しめているのかということを今日だからこそ、私たちは今深く心に置かなければいけないんじゃないかって。あのカインが、殺しあってしまったその後に、神様が言われる。「地は、あなたの兄弟のアベルの血を飲んで、そしてあなた方よりも多く、地が呪われるものとなった。そうしてもはや実りをもたらさない。あなたは地の上に住む場所を失って放浪するのだ。」そう言われています。私たち自身がおいしい果実を取ったことによって、地を呪われたものとして、実りをもたらさない現実を作ってきたんじゃないかって、そのことを私たちは、決して風化させてはならないし、今こそ私たちはこのことにしっかりと向かい合わなければならない。神様が作られたこの世界の中に、私たちの住む場所が本当に与えられているのか。このオイコスを、神様が与えて下さった家、故郷を失って、私たちは放浪するものとなっていないか。そのことを改めて、この時に思い、そうしたことを作り出してしまう、私たち自身の欲望、或いは、私たち自身の内にある自己中心性、誰かにこんなことは押し付けておけばいいんじゃないって思っている現実がある。私たちは平和であるけれど、あの人たちに苦しみを押し付けるということを、私たち一人ひとりは意識の上ではそれを望んでいるわけではないのに作り出してしまっている、この世の現実を私たちはもう一度しっかりと見ていかなければならないのかなぁって、そんなふうに思っています。

そうした現実を見れば見るほど、私たちは、ああもうどうしたらいいのだろうって力を失ってしまう。学べば学ぶほど、これはどうにもならないって思うことばっかり。

けれど、私たちは諦めちゃいけないんだって思っています。それは、神様が決してあきらめられないからです、私たちのことを。こんなにも罪にまみれた私たちを絶対にあきらめない。あなた方を一人にしない、私があなたと共に行くとイエス様を送ってくださって、私たちに平和を満たしてくださって、もう一度歩こうって呼びかけて下さって、許しを与えてくださって、新しい命を与えてくださって、そうして、私たちに、私たち自身が生きる使命を与えてくださったって。それがキリストの福音だと私たちは知っています。神の真実としてキリストが与えられて、その生涯を私たち

のこの現実の中に歩んでくださって、十字架にかかってくださって、しかし、復活の命を示してくださって、そうして私たち自身の内においでくださって、私たちのうちに働いて、生きてくださる。それが信仰の神秘だと思います。私たちのうちに起こされる奇跡なのだと思います。パウロはガラテヤ2章20節のところで、生きているのはもはや私ではなく、私のうちにキリストが生きてるって、そういうふうに記していますが、これはパウロだけのことでなくて、私たちのうちに起こされる、信仰の出来ことだと、教えられていると思う。で、それが福音です。それが信仰の中に起こされる、意図されるという出来事だと思う。この一点に私たちの信仰はかかっている。一点絞り。

そのことの中で私たちは、きっと今改めて、あの16世紀の宗教改革の出来事も振り返っているし、そのことの中で、あのルターが訴えたことも改めて受け止められているように思う。そのことが、今この時に、20世紀から21世紀を迎えることの中で、カトリックとルーテル教会だけではなくて、メソジストや改革派や、或いは、聖公会という世界規模の交わりが、この信仰義認の共同宣言、みんなで一つに受け止められるねって確認できてきている。これが、今年この宗教改革500年を迎えているっていうことの特別さなんだと思います。だからこの一致の中で、私たちはもう一度、私たち自身の中に経験されているこの一致、お互いに分かれてしまって、分裂してしまって、分かり合えずにとどまっているんじゃなくて、もう一度手を結びあっていく、その信仰の奇跡を私たち自身がもう一度確認して、そして共どもに歩んでいきたい。それは教会がやっているっていうことじゃない。決して教職者がやっているっていうことじゃない。信徒一人ひとりの中で経験されている交わり、喜び、祈り、そうしたものを示していくことができたらなって。宗教改革の中では全信徒祭司とそう言ってきました。第二バチカン会議以降、カトリックの方々の中にも信徒使徒職、信徒である洗礼を受けた者たちが皆この召しにあずかっている。私たちが生かされているこの世界の中で、証をするものであるということを、私たち自身、もう一度受け止めていきたいと思っています。

ルーテル教会の信徒の方、長崎で、あれは女学校の4年生の時だったと思いますが、樋口美枝子さんという方が被爆をし、そして、その被爆の体験の中で、しかし改めて信仰を生きるようになっていかれる。ご自身は長崎大学の医学部で、第一期生として卒業されて、そして女医さんとして、もちろん戦争体験者、そしてその帰ってきた方々の、戦争で傷ついた体を癒していくという、そういう働きを非常に大事にされた方でしたが、その後も苦しみの中にある人たちに、本当に医療という働きを通して、もちろん働かれた。けれど、そのこと以上に被爆の体験をもってキリ

ストの証をされました。ゼノ神父の働きも、樋口さんはその証の中に込めていろんな働きをされ、『ニンゲン・コレ・ミナ・オナジ』というミュージカルを広げていくということもされましたね。そうした証は、信徒である一人ひとりの働きの中で、生まれてくるものがあると思います。私たちが今日ここに集ったこと、そのことの中で私たちはもう一度、福音の喜びを胸において、それぞれがキリストの愛を証していく。その勤めの中に、歩んで行くことができたらなーと、これだけ集まった私たちが、共どもに歩み出していくことができたらなあと、そんなふうに思っています。

（小泉基牧師）

石居先生ありがとうございました。

ルター派の神学校の校長先生らしく、内在する罪の問題からお話しくださいました。

私たちは歴史の中で、様々な苦難をも経験いたしますけれども、その最も大きいものとして、戦争の経験があるわけです。けれども、なおそこに戦争を生み出してしまう私たち人間の罪の問題、キリスト者、教会の責任の問題も見ていかなければならないのではないか、そしてそこに私たちの罪があることがはっきりしていく。けれどもなお、それにも関わらず私たちを大切にして下さる神様の愛に押し出されて、それにも関わらず、私たちが神様から託される平和の役割が、私たち一人ひとりに与えられているのではないか、とそういうお話しではなかったかと思います。

石居先生のお話を受けまして、最後に「エキュメニズム、わたしたちの祈り求める平和と共生の未来」というタイトルで、今度は光延一郎先生にお話を伺いたいと思います。よろしくお願いいたします。

石居基夫牧師

シンポジスト発題　3
エキュメニズム、わたしたちの祈り求める平和と共生の未来

光延一郎神父（イエズス会司祭）

皆さんこんにちは。今、私たちは橋本神父様から、長崎の歴史の中での「崩れ」という言葉の深い意味を教えていただきました。それは大きな試練の出来事が、これを通して新たな未来が開かれていく突破口になりうるのだということでしょう。そしてそれは結局「キリスト一点絞り」という印象的な言葉で示された、私たちの信仰の核心そのものへの向き合い方に懸っているということですね。私は「キリスト一点絞り」という言葉を聞いて、テイヤール・ド・シャルダンというカトリックの神学者が語った「オメガ点」という思想を思い出しました。それは、私たちが生きているこの人類社会も、あるいは地球の歴史、さらにこの宇宙の全体は、キリストにおいて一つになる統合点に向かっているという壮大な展望です。これは、今日、私たちが記念している教会間対話、エキュメニズムの最終到達点でもありますね。石居先生からはまた「崩れ」は、ただ自動的に復活に向かうのではなく、やはり十字架を通してのものである。そしてその十字架には、私たちの罪がある。それは「崩れ」という言葉に対して言えば「破れ」、私たちが大切な関わりを自ら断ち切ってしまう私たちの現実もある。こうしたことを示してくれたのが、マルティン・ルターをはじめとする宗教改革者たちだったということを改めて感じさせていただきました。

長崎と宗教改革

私は東京生まれですが、カトリック信徒として、ずっと長崎という土地に憧れというか懐かしみを抱いておりました。そこで生活する機会が与えられたのは、私が属するイエズス会の養成には「第三修練」という過程があり、十数年前のひと夏、二か月間を長崎・立山の黙想の家で過ごしたときでした。

イエズス会に入って最初の二年間は、広島の修練院で過ごしました。それゆえ私は、奇しくも広島と長崎という二つの被ばくの街で養成を受けたわけです。その第三修練の折、休みの日には、私は浦上や外海、平戸、島原、天草、五島とキリシタン時代からの歴史の地を訪ね歩きました。また毎日のように黙想しつつ歩いたのが、立山から金毘羅山を越えて浦上に降りる山道でした。その道は百五十数年前に、プチジャン神父や浦上の信徒の方々が大浦教会との連絡のために通った道でした。「そうか、この同じ道を、日本のカトリック教会を再建した人々が歩い

たのだ」としみじみ思いめぐらしながら、歩いたものです。途中の山沿いの家々には、きっとカトリックの方もお住まいで、その人々は、潜伏時代から受け継いだ信仰を今にいたるまで守って来られたのだなということも感じながら、私もその歴史を自分の内に深めていけるようにと歩きました。そして山を降りると、必ずこの浦上天主堂でしばらく祈りました。その時、教会の正面にある碑に気づきました。今年は、潜伏キリシタンが250年間以上の沈黙を破って、浦上から迫害覚悟でカミングアウトした出来事、すなわち「浦上四番崩れ」から150年ですね。来年はさらに、その信徒たちが各地に配流された、浦上の人々が言う「旅」から150年です。それはまた同時に明治維新150年でもあります。この150年という年月は、日本のカトリック教会にとっては、潜伏から迫害をもいとわず、自分の信仰を堂々と公に宣言したことから始まった新しい時代でした。私は、ここに日本の歴史の中でも珍しい、人間の尊厳と人権、自由を貫いた人々がいることを誇らしく思いました。その碑は大正9(1934)年に建立されたそうです。昔の言葉で書かれており難しいので、私なりに現代風に読みかえてみるなら、次のように書かれています。

「浦上はもともと寒村に過ぎなかったが、我が国におけるキリスト教の発祥地として、あたかもユダヤにおけるエルサレムやベトレヘムと同様に歴史に特筆大書されるべきだ。…キリスト教信仰の種は、秘められた永遠の生命を伝えるために、厳しい冬の霜のもとで春の発芽を待っていた。それが明治維新となり、真理の光は、鎖国禁教の幕を破り、この浦上の一角からその新な輝きを発した。私たちは今、父祖の功績を永く伝えて子孫の宝とすべく、この碑に刻み、後世に遺す…」

禁教下という非常に厳しい状況の中で、自らの信仰を公に宣言したこの人々は、人間の自由と尊厳に目覚め、それを訴えて立ち上がった人々であり、これはまさにマルティン・ルターを初めとする宗教改革者たちの預言者的意義と深くつながるところがあると思います。

今日の世界は、日々のニュースでご承知の通り、おそらく経済的な格差に基づく暴力、差別と憎悪、また宗教の名による分裂が拡がっています。しかしその根本には価値観の問題があり、それはやはりお金が中心でしょう。より大きな利益と強い権力を持ちたいと思う人間の罪の問題が、その底に根深くあると思います。世界におけるキリスト教の影響力も、少しずつ公共的領域から締め出されつつありますし、またそれ以上に、今、世界の人々は、神の存在を見失っている。人々が「神」という言葉の意味を見失い、倫理や人間の幸福についての規範がわからなくなっているでしょう。マルティン・ルターが生きていた時代にも、そういう状況があり、

彼はそれに対して預言者の役割を果たしました。

当時、カトリック教会は大きな組織で、その権威、権力に奢ってしまい、信徒一人ひとりの信仰を大切にしていない状況があったでしょう。マルティン・ルターは、それを再び神の前に立つこの「私」、一人祈る「私」の実存問題に引き戻しました。それにより本来の「福音」、私たちの信仰の原点に戻る運動が起こりました。それゆえ、今年の宗教改革500年記念とは、福音というキリスト教の原点に、ローマ・カトリック教会とさまざまな他教派の皆さんが一緒に立ち戻るきっかけになるべき年だと思います。それを通して、お金の価値が第一優先で、愛、正義と平和、真理、自由など、一番柱になるべき価値観が隠れてしまっている状況に対して、キリスト者の一致と協力が超教派のネットワークにおいてもう一度新たにされていくことが大切だと思います。その意味で「崩れ」の時を今一度与えられているのだと思います。

現代のエキュメニズム

少し小難しい話になりますが、「エキュメニズム」すなわち「教会一致運動」という言葉は、ギリシア語の「オイクメネー」という言葉に由来するそうです。それは、国境や民族、人種などで区切られない、人の住む全世界という意味です。そしてこれは更に遡ると「オイコス」という言葉、つまり「家」とか「住まい」という意味のギリシア語に行きつきます。「エコノミー（経済）」も同じ言葉の派生語であり、家のやりくり算段、家政という意味です。「エコロジー」も同じく、私たちが住む家をどのように神様の望みにふさわしくしていくかという問題です。2015年に公布された、教皇フランシスコの『ラウダート・シ』という環境問題を中心にする公開書簡「回勅（エキュメニカルレター）」の副題も「私たちの共に暮らす家を大切に」です。人類にとって共通の課題が、今、エコロジー問題だとしています。

本題から少し離れますが、現教皇フランシスコのビジョンの根本が何かといえば、それは「いつくしみ」と全方位にわたる「和解」だと私は思います。

人間が、世界に対する関係を開いて「神とのかかわり」「隣人とのかかわり」「大地とのかかわり」、そして「私たちの自分自身」との和解を得ることが「救い」でしょうが、『ラウダート・シ』は、外の自然環境との和解を取り戻すためには、まず人間は内面的環境における自己との一致を取り戻すべきだと言いました。私たちの「神」「人間相互」「被造界」「自己自身」との全方位的な「和解」を取りもどすことで、『ラウダート・シ』の重要なキーワードである「インテグラル・エコロジー」にたどりつきます。

「インテグラル」の意味は、「さまざまなことが本質をめぐってそれぞれつながり合い、影響しあっている」ということでしょうか。人間の身体も脳や心臓、背骨という中心をめぐって、筋肉、血液、神経などがつながり合い、結びつくことで、調和のとれた健康な身体が成り立ちます。すべては関わりあっている。環境問題も、神との関係、人間相互の社会関係、そして大地の問題とつながりあい、それがバランスよく関係していることが大切です。全体が上手く繋がりあって調和して、和解しあっている状態が幸せな状態、それがすなわち「救い」です。その根本的な基礎が、教皇フランシスコによれば、まず神様との関係。そこから人間同士の横の関係、さらに大地、環境、創造、エコロジーの問題があります。これらすべてに私たちは関係を持っている。

これらの関係を人間が自ら断ち切って、自分から不幸な状況を招くこと、それが「罪」でしょう。「エコロジー」と同じ由来をもつ「エキュメニズム」の問題も、人間同士の横のかかわりにおいて、人々が同じキリストを見つめながらも、互いに党派、宗派、教派に分かれ、分裂してしまっている。これはやはり私たちの罪、関係の傷の問題でしょう。

現代のエキュメニズムは、1910年のエジンバラ世界宣教会議、その後の世界教会協議会（WCC）の活動などから始まりました。ローマ・カトリック教会もそれに刺激されながら、当時の教皇ヨハネ二十三世のイニシアティブのもと第二バチカン公会議で始まり、1965年には、1054年以来続いていた東西教会相互の破門宣告を取り消すことからエキュメニズムに参加し始めました。ヨハネ23世は、長くギリシアなどに外交官として派遣されていたため、特に正教会とのエキュメニズムに非常に深い思いをもった人でした。

その後の諸教皇たちも、12使徒の頭ペトロの後継者として、教会一致への強い責任感を示してきました。第二バチカン公会議の根本動機は、ヨハネ23世の強い意向のもと、①教会の一致（エキュメニズム）、②平和（二度と戦争をしない）、③ローマ・カトリック教会が「世界」に自らを開くこと、の3点でした。第二バチカン公会議『教会憲章』（1964年）の第一項、一番最初の言葉はこう言います。「教会（これはローマ・カトリック教会だけでなく、キリストのもとに集まる全ての教会という意味です）は、キリストにおけるいわば秘跡（サクラメント）、すなわち神との親密な交わりと全人類一致のしるしであり道具」であると。そこに向かってローマ・カトリック教会とすべての教派は、一緒に協力し合うべきだということですね。またヨハネ・パウロ2世は、回勅『キリスト者の一致』（1995年）において、次のように述べました。「キリストを信じる人々は、ともに結ばれて殉教者たちの跡を追おうとすれ

ば、分裂したままでいることはできません。あがないの秘義を空洞化しようとする世界の動きを、真に、また効果的に阻みたいなら、十字架についての同一の真理を、手を取り合って告白しなければならないのです」。

こうしてローマ・カトリック教会のエキュメニズム対話は、さまざまに進められました。私も委員を務めるルーテル/ローマ・カトリック委員会でも1967年より対話が重ねられ、1999年には、教理論争の中心にあった義認問題をめぐる『義認の教理に関する共同宣言』が調印されました。

福音によるキリスト教の再生というルターの意図

歴史を振り返ってみれば、宗教改革は、中世の終わりからすでに始まっていました。「暗黒の時代」とイメージされがちなヨーロッパ中世は、実は、改革の連続でしたし、その流れの中で、マルティン・ルターの宗教改革も起こったのでした。聖書の自国語訳はルターが最初に行ったという印象がありますが、スペインなどでも、すでにさまざまな言語に訳されていました。またいわゆる「免償状」の習慣についても、ドイツ以外でも行き過ぎや悪用が問題にされていました。ちなみに、よく誤解されることですが「免罪符」ではなく「免償状」です！「免罪符」などというものが出されたことはありません。「免償状」とは、カトリックの「ゆるしの秘跡（告解）」において、神から罪のゆるしをいただく際に、マリアさまに祈りをささげるなど「償い」をすることが勧められるのですが、その際に、有益な事業のために献金するなどで、「免償」、償いに代えることが行われたということです。

しかしながらルターは、先ほど石居先生がお話しくださったように、問題を組織ではなく、恵みと義、そして信仰とは何かという、キリスト教信仰にとって核心的で、人間の実存的な問題として提起しました。これは、たしかに重大な「宗教改革」でした。神の「義」とは、処罰し復讐する「正義」ではなく、人間を赦し、慰め、「自由」にする義であり、ただ神の「恵み」とあわれみにより、人間の外面的なわざでなく、「信仰」によって救われるということに人々の目を開きました。「九十五か条提題」も、全キリスト教界、普遍教会の再生・刷新を求める議論への招きでした。それゆえ、現代のカトリック神学では、ルターは「福音」に基づき「本来のカトリック的なもの」を取り戻そうとした人、カトリック教会の伝統に属す人であったと評価されています。

光延一郎神父

「本来のカトリック性」を求めて

そこから「崩れ」の話に戻りましょう。すなわち、宗教改革500年は「浦上第四崩れ」に続く原爆被爆という「第五崩れ」、第二バチカン公会議を「第六崩れ」と見る救いの歴史の観点からすれば、第七の「崩れ」、ラッキーセブンですね、将来訪れるはずの、キリスト教諸教派、さらに人類社会のすべてがまとまる最終的な「キリスト一点絞り」に向かう「第七崩れ」の始まりだと言えるでしょう。

「カトリック」という語を聞くと、私たちは自然に「ローマ・カトリック」教会と同一視してしまいますが、ローマ・カトリック教会は、ローマのペトロを頭とするキリスト教の一宗派です。しかし元々キリスト教は、コンスタンティノープル、アンティオキア、エルサレム、エジプトのアレクサンドリアにあった諸本山が、緩い形で一致、協力し合っていたものですね。

「カトリック」とは「カト・ホロス」、つまり前置詞kata（～に従って）と名詞holos（全体）との複合体です。「ホロス」とは、ホリスティックという言葉を今も使っていますが「全体、全面的」という意味ですね。ですから「カトリック」の意味は「全体に属していて、全体に従い（行動する、意識する）」ことです。私たちの人生の方向性を、普遍的なところに向けて、他とも一つになりながら、全体を形成していくということです。クリスチャン皆が、父なる神とイエス・キリストの愛が全地に行き渡っていく歴史に参加し、各自が自分の場で、全体を考えながら、自分のできることをやっていく、これが本来の意味での「カトリック」だと思います。

ところが、歴史をふり返れば、この本来の意味は取り違えられ続けました。四世紀のニケア公会議の後の「カトリック性」は、普遍性・一性・全体性という本来の意味が「正統性」つまり「オーソドクシー」に変わってしまいました。それに従い、教会も政治・文化的な権力、権威や倫理秩序を担う固定的な制度、正統性を維持する法的秩序のようなものに変わっていきました。

また宗教改革以後の近世においても、合理主義や啓蒙主義という当時の思想の影響のもと科学が発展しましたが、そこでキリスト教本来の愛の倫理は、合理的思考や規則と指示に取って代わられたといえるかもしれません。ローマ・カトリック教会は、法や儀式、聖職者が中心になり、制度的統治の面が強くなりすぎたでしょう。またプロテスタント諸教会は、神を上から支配する超自然的、全能の存在として位置づけ、それに対して人間が罪悪感や自己疑惑に閉じ込められてしまうキリスト教をつくってきたようにも思えます。こうして視野が狭くなり、キリスト教が本来展望している大地・地球・歴史・宇宙、すなわち創造に満ちる恵みの豊かさ

から引き離されてしまったかもしれません。

ですから、今日、ローマ・カトリックも含め、キリスト教諸教派が、本来の意味での「カトリック性」「カトリシティ」にもう一度戻ることがとても大切だと思います。

地上の国家は、自国支配者の経済的利益を求めて、覇権争いをやめません。米国・中国・ロシアという大国の利害が交錯する北東アジアは、残念ながら、まさにその焦点です。また、キリスト教諸教派がすぐに一致・統一していくことも難しいでしょう。

しかしフランシスコ教皇は、世界の平和や一致の問題を考えるにあたり、完全な「球」になるのは難しい、しかし「多面体」、多少でこぼこしていますが、全体として丸い、そういう状況をイメージすることが大切だとおっしゃいます。完全な球であるよりも、多面的な球になること、例えて言えば、多面体のダイヤモンドが光を互いに反射させ合って輝くように「和解した多様性」をつくっていくこと。それぞれの文化や歴史の多様性をしっかり担った上で、互いに理解し合って、多面体を形成していく。キリストの光を浴びることによってカットされたダイヤモンドがきらきらと輝く。そういう世界と教会のイメージをキリスト教諸教派が共有することが大切ではないでしょうか。

そしてそこで必要なのが、宗教改革が問題提起した神の「恵み」「恩恵」でしょう。その恵みを、私たちがいつも狭く閉じこめられてしまっている「自分ファースト」を開いて、全体に向けて乗り越えていくための「神の力」として受け取ることがだいじではないかと思います。私たちに求められるのは、いつもより普遍的な全体、すなわち「カトリック的」なところに向かって小さな自分を脱皮していく姿勢でしょう。

それが、先ほど橋本神父さんがお話しくださった「崩れ」の状況をイエス・キリストの「復活」の現れに統合していく私たちの課題ではないでしょうか。

新たな「カトリック性」は、私たちを希望に向けて目覚まし、キリスト化される新たな世界、いのちのコミュニティの創造に参加することを促します。今年の「宗教改革五百年」記念が、共通の救い主イエス・キリストを祝うことで、世界のまっただ中におけるエキュメニカルな「カトリック性」を見出す出発点となることを祈ります。

そのために、わたしたちキリスト者ひとり一人にまずできることは…、組織的な統合よりもむしろ個人の刷新「スピリチュアル・エキュメニズム」を深めることではないでしょうか。新たな「カトリック性・カトリシティ」に向かうスピリチュアリティ。私たちが互いに目を覚まし、この世界がキリスト化されていく地平に共に眼差しを向け、協力できることを一緒に行うこと。これを今日から、私たち皆で、長崎から共に発信していきましょう！

（小泉基牧師）

ありがとうございました。光延先生には、500年前に分裂をもたらしてしまった、ルーテル教会とカトリック教会には、その教会の全体性を回復していく、ある種の責任があるのではないか。そのために福音に立ち戻る時として、この500年の時を私たちは意識して生きていくということではないか。そのために、エキュメニカル、人の住む、全世界の全体性を回復していくために、私たちがともに働いていく責任と可能性があるのではないか、そのようなお話をお伺いできたかと思います。

（小泉基牧師）

お三方の先生のお話をお伺いしましたので、少し共通するテーマがあるかどうかと思いながら、私自身は三人の先生のお話を伺いながら、私たちの中にある痛みの問題、そしてそこから回復していく、そこから出発していかに私たちが平和を実現するものとなって行けるのか、そこにどういった課題があるのか、そういう投げかけを受けたような思いがいたしました。

橋本先生には、教会が経験してきた痛みの歴史があると。けれどその痛みを経験してきた、その象徴としての、長崎の教会が、いかに他者の痛みを担うことができる存在になっていけるのか、というあたりをお伺いしたいという気もいたしますし、或いは、石居先生には、痛みを生み出してしまう自己の罪の自覚ですね。そこからどうやって私たちが自分自身を変革していく力やその動機を得ていくことができるのか。また、光延先生には、カトリックの精神の中には、痛みや破れのある世界を回復していく、包み込んでいく神様の愛というイメージがあるのだ。それが、カットされたダイヤモンドのように、多様性がきらめく社会を作り出す可能性があるのではないかという提起を受けましたけれども、私たちの現実の社会の中には、現実の社会の中で多様な存在と共存していくときには、やはり、違う存在と向き合うという痛みを無視していくということはできないであろうと思います。その時に、例えばカトリック教会に引き付けていいますならば、たくさんの外国人の信徒を抱えておられる、そして教会を形成していく、そういった経験では一日の長がある教会であるというふうに私は思っていますけれども、そこをどういう限界と、そこを超えていく可能性があるのか。

私の問題意識ですけれども、そこから離れてくださっても構いませんけれども、三人それぞれ、先生の話を聞いていただいて、もう一度、橋本先生から順にお話をお伺いしてみたいと思います。橋本先生、石居先生、光延先生と、もう一回お話いただけますでしょうか。

（橋本勲神父）

問題は時間なんでありますが。痛みということ、罪ということ。罪になるぞ、罪を犯さないように、という教義というものがあって、その罪を感じ得るというすごさ、素晴らしさということは、あまり説かなかったというふうに思っております。つまり、痛みを感じ得るというのは生きているという証拠でありまして、これは人の痛み、人の苦しみ、そういうものが感じきれない。痛みを感じきれない。段々段々感覚を失っていき、それが極まったのが屍、死体というわけで。これは踏んでも蹴っても決して悲鳴を上げない、痛くないわけです。この死の状態、いわゆるイエス・キリストの死ではない死というものがあるんだと思いますね。ですから罪ということの、積極的な、感じ得る生き生きとした生命力、人間は罪を感じ得るからこそすごいんだという、そういうメッセージを今本当に発信する必要があるんだというふうに思います。

実は長崎は、修学旅行の方々がよく来られて、私の教会にも来るんですが、いつもお話しするのは、ヨハネ・パウロ二世が「過去を振り返り、未来に責任を持て」と、こういわれた。掘り起こすべき過去というのは、もちろん戦争、被爆体験の過去であり、殉教・潜伏の過去、二つあるんだと思いますが、その二つの記念をする場所が長崎にはあるんだということをお話しするわけでありまして。長崎に爆心地は二つあるという話をするわけです。一つは、この松山の上空500mで爆発した原爆の爆心地というものがあります。死の同心円がそこから広がっていった。もう一つの爆心地というのは、駅前の西坂公園にありますが、これはさすがに、確かに、同じように見えるんだけど、約800名の方々が処刑された、いわゆる殉教したわけでありますが、こちらは7万人ですから数においては全然違うわけでありますが、西坂のここは、いわゆる爆心地でもある。これは核爆発したところである。人間の核が爆発したところ、そういう意味で、いわゆる爆心地なんだ。ここからは命の同心円が広がっていった。死の同心円をもたらす爆心地と、命の同心円をもたらす、2つの爆心地があるんだということをお話しするわけであります。それは、いわゆる福音化の、イエス・キリストがもはや生きているという形が、迫害という外圧ではあったけれども、この殉教者たちの中に現実に起こった。「パライソ、パライソ」とこういうのは、まさにこれが極まって、この世界に現れましたよという宣言であったと思いますね。パライソに行くとも言わない、もう来ましたよなんていうんじゃなくて、もうパライソに浸かりました、ここに現実に現れました、ここに光ってるでしょ、見えますか、というこの世界への強烈なるメッセージ。神の国の到来であり、今自分自身の中のイエス・キリストの復活が現実にここに起こった。そういう証しというものが起こって、まさに人間の核にイエス・キリストが着座し、そこから復活していった。その人

間の核爆発、これは別名、愛とかなんとかっていう言葉でも呼ぶんでしょうけれども、そういう地なんだ。一方は、残念ながら物質の核爆発であって、これは死の同心円をもたらす。ですから、両方とも核爆発ではあるが、全然違うんだ。ですから、核実験は決してしてはいけないが、人間の核実験、人格と人格のふれあい、人格と人格のぶつかり、そこから出る火花、愛というものの爆発、実験。こういう意味の核実験は繰り返されなければならん、こういう話をするわけでありますが、だいたい、この女子高生たちはその辺の話であくびをする、というふうな話になるわけでありますが、ま、ご参考になればということで。あまり時間を取るわけにはいかないので終わらせていただきます。

（小泉基牧師）

司会にご配慮いただいてありがとうございます。では続きまして石居先生、お願いいたします。

（石居基夫牧師）

ありがとうございます。痛みということを考えさせられることですよね。

どうやって私たちが痛みを作り出してしまう罪から立ち直ることができるかって。ルターがそのことを深く問うたと思うんですけれども、人間にはどうしてもできないんですよね。私たち自身に力がない、けれど神様の言葉は働く。つまり、崩れの中で純化が起こる、聖書のみだというふうに言ったのは、単なる純化だということではなくて、聖書に書かれている言葉は、単に書かれた言葉じゃなくて、私たちに語りかけられる、神の語りかけ、働きかけだって。働きかけに私たちが直接あずかっているかって。ルターはやっぱりあの時代の中で、信徒一人ひとりがそのみ言葉から遠いものになっているんじゃないだろうか、み言葉そのものにあずかっていくということをすごく大事にしたと思います。それは、自分自身が体験して、み言葉によって自分の罪も知らされたし、しかしそれにも関わらず、自分に働きかけて、それでも立ち上がらせる、復活の力を私たちのうちに起こして下さる、そうした出来事が、ルター自身の中に体験されていったのだと。だから、そのみ言葉にあずかるようにと、ルターは宗教改革を起こして、聖書も翻訳し、ミサも当時のラテン語のミサだけじゃなくて、民衆の分かる、人々の分かる言葉での礼拝にしよう、そしてみ言葉がみんなで分かち合われるようにって、賛美を歌うコラールを作って、会衆が歌う讃美歌を作りました。み言葉そのものによって私たちが生かされていく。み言葉を抱きしめて、み言葉を携えて、この礼拝堂からそれぞれの生活に帰って行こうって。そういう私たちに対する、み言葉の力に対する信頼、そこにのみ私たちが立ち上が

っていく根拠があるんだというのが、おそらくルターの一番言いたかったことだろうと思うし、きっと私たちが今、カトリックでも、プロテスタントでも、皆そのことにきちっと立とうということになっているんじゃないかなというふうに思っています。よろしいでしょうか。

（小泉基牧師）
　ありがとうございました。では、光延先生お願いいたします。

（光延一郎神父）
　そういう痛み、分裂、破れの痛みを各教会がどういうふうにとらえているかっていう、とても難しい問題ではあるんですけれども、今ちょっと心の中に思い浮かんだのは、カトリック教会が、コミュニティなんですけれども、そのイメージしてるモデルっていうんですかね、そこらへんに関係があるのかなと思いました。すなわち、やはり家族かなと。家族性ですね。もちろん教皇を中心とし、男性の聖職者の方々は独身、また修道女の方々もおられ、ご自分の家庭を実際に作っておられる信徒の方々もおられる、そういう調和の中で、といいますかね。また、そこに秘跡ですね、特に許しの秘跡っていう、ミサにあずかる、聖体拝領するとか、秘跡を大事にしている、或いはマリア様ですかね。ま、その辺のところ、なかなか他教派の方には、理解が難しいところがあるかもしれないけれども、しかし、やはり基本になるのは、悪いことをしたりとか破れの中で、自分が本来やるべきことがどうしてもできない人間の弱さ、そういう所から脇道にそれてしまうとかね。でも、やはりそこに帰っていく家があるというかね。それを大事に受け止めてくれる家族がいるということが、やはりある意味、とてもカトリックにおいては、助けになっているかなというふうに思いますね。許しを与えてくれる。もうどんなに悪いことしちゃっても、その苦しさをもう一回神様に戻ることによって癒していただける。そういうところがですね、ある意味カトリックの長所かなっていうふうに私は思っています。でもそれがつい組織の方に寄り掛かってしまって、もっと個人的にしっかりそれを把握すべき、というところを忘れがちになってしまう、それが、マルティン・ルターが指摘したことでもあるかなと思いますけれどもね。でも、やっぱりもう一回フランシスコの言葉をね、思い浮かぶんですけれども、さっきは多面体の話をしました。もう一つは、時間か空間かっていうね。平和を作って行くには、宗教は時間のことを考えるべきだ。空間というか、その場、今色々な問題があって、北朝鮮のミサイルとかなんとか、色々な問題はあるんですけれども、その空間の状況を変えるのは、宗教はあまり力がない、政治のやることである。だけど、空間じゃなくて時間、もっとじわじわ、というか、人々の心の、精

神の深いところに本当の理解を開いていく、そういうのが宗教の役割だっていっているわけで。で、結局、そういうキリスト一点絞りに向かって歩んでいくには、必ず試練とか迫害とか、そういうことは必ず起こるわけで、だから崩れていくにおいては、もう避けられない。でも、そうなんだけれども、それを歩んでいくために家族がいるというところがカトリック教会のいいところかなと、私個人は思っております。

（小泉基牧師）

ありがとうございました。本来ならお話をさらに展開してですね、平和を実現するものとなっていく、というところのお話をお伺いしたかったと思っていたのですが、少し時間が無くなってきてしまいました。皆さんの中からもう一言ずつ、もしあればですね、私たちの課題とビジョンみたいなところでお声をいただいて、もうなければ締めていくという感じで、時間になってきてしまっています。いかがでしょうか。

（石居基夫牧師）

今回エキュメニズムということでルーテル教会とカトリック教会でたくさん対話をしてきました。それぞれ持っている形、神学みたいなものに固まっていただけであれば、きっとぶつかっていただけであったと思います。でもそれをみ言葉に聖書に戻って、私たちどんな家を作ってきたかな、どんな形作ってきたかなって、それをたどりながらお互いに分かりあっていくところ、あ、こんなに一緒だなっていうことを確認してきて、そして、この50年の対話の歴史が、今のエキュメニズムを作ってきていると思います。私たちは、きっと違いのことを見つけるとぶつかるばっかりだと思うんですよね。でも、現代の世界の中で、今のそれぞれが大事にしている形を崩しても、一番大事なものをやっぱり確認して、お互いに一つになっていけるようにって。それが主の呼びかけだということを私たちは聞いているのだと思います。そのことの中で、私たちは祈りを一つに出来たらなって、そんなふうに思いました。

（橋本勲神父）

私の日ごろの体験なんですが、ささやかな説教をいたしまして、「神父さん、すごい説教ですね。」っていつも言われないんだけど、言われたことがあって、それはどういうことかっていうと、「朝の神父さんの説教を聞いて家族で話し合ったら、一人ひとりとらえ方が違ってた。お父ちゃんとお母ちゃんと子供、全然違ってた。それで、すごいですね、とこう言う。「あらまあ、言いたいことを伝えきれなかったかな」と思ったら、この方々は、「すごいですね」と言われた。いわゆる一つのメッセージがいっぱい違う形でとらえられる。これは教会内に違いってものが遺憾なく発揮され

ていくわけであります。これはまさに豊かさであるというふうに思いますね。武者小路実篤という作家の方がいますが、「君は君、我は我なり、されど、仲良き」という、されど、あんたはあんた、わたしはわたし、全然違うんだがしかしそれでも仲がいいんだ、とこう言われた。しかし、キリスト教的平和というのは、「君は君、我は我なり、されば、仲良き」。だからこそ仲良くできる。これが神業が作り出す、主の平和の正体であろうと思います。既にこのすごい違いが、私のささやかな説教でさえ、ばーっと広がっていくわけであります。その違いが、まさにそこに醸し出されて、しかも、大自然が違うものを全部生かしているように、人間界もそういうふうに作り上げられていく。これはまさに主の平和の実現であろうかなというふうに思います。

（光延一郎神父）

こんなにたくさんの方が一つの聖堂を埋めている、そして外国からもお客様を交えてっていうね、やはりこれは、本当に素晴らしい場にいさせていただいているなってことをつくづくと思いますね。とかく教会、カトリック教会の中でも、ま、他でもそうかもしれないですけれども、信徒の方の高齢化、若い人もなかなか来ないとかね、人が少なくなって、これからの教会はいったいどうなっていくんだろうかっていう心配もあるんですけれども、ま、しかし、実はこうやって、深い所ではやはり繋がりあっている、多くの仲間というか、同志というね、そういうのがいるんだっていうね、それが目に見える形で、今日はこうして見ることができて本当に素晴らしいと思うし、こういったことが、私たちは忘れないで、日本の教会においても色んな形で広げていくことができたら素晴らしいなというふうに思いました。

（小泉基牧師）

お三方から、貴重なお話をお伺いすることができました。500年前に分裂を経験した、或いはもたらしたと言ってもいいかもしれませんけれども、この私たちが、この500年後にともに集って、そしてともに平和を考え、祈る時を持っていく、時間を持つことができました。この分裂を作り出した私たちが、教会の全体性を回復していく、その役割がある。そして教会の全体性を回復するだけではなくて、このたくさんの破れを抱え込んでいる世界の全体性を回復していく。そういう役割に私たちは遣わされているのではないか、そのように感じられた先生方のメッセージでした。

そして、この集まりをもたらすことができたのは、50年に亘ります両教会のエキュメニズム委員会を通した対話の積み上げ、継続があったからこそ、私たちは今日こうしてともにこの会堂に集うことができたのだと思います。しかし、私が思いますの

は、なお、テレビドラマで「事件は会議室ではなくて現場で起こっている」というふうに申します。私たちが、例えば、カトリックの正平協と、私はかつて日本キリスト教協議会で幹事の仕事をしておりましたが、このNCCの平和委員会が平和の問題について共に働いていく、或いは、釜ヶ崎の寄せ場といわれる場所で、ルーテル教会の喜望の家とカトリック教会の旅路の里が、キリスト教協友会を形作って、ともにそこで働いていく。或いはこの長崎でも、ホームレスの支援のために、プロテスタントの教会と長崎のカトリックの教会が、ともにそのために働いていく。この、現場で共に働いていく中で、世界の痛み、破れの回復が起こってくるのだと、そのために私たちは遣わされているのだと、そのことを覚えさせられた、この時間でありました。

つたない司会でありましたけれども、お三方のお話をいただいて、良い時間を過ごすことができたというふうに思っています。これを持ちまして、このシンポジウムを閉じさせていただきたいと思います。皆さんどうもありがとうございました。

小泉 基 牧師

ご来賓の紹介

（白川道生牧師）

海外からご出席を賜った方々がいらっしゃいますので、ご挨拶をいただきます。

ドイツ福音主義教会副議長であられまして、神学・教育部門の議長であられます、ティース・グンドラッハ牧師です。それから、ドイツ・カトリック司教協議会事務局長代行、信仰と養成局の局長であられます、フランク・ロンゲ博士です。続きまして、バチカンの駐日教皇大使であられます、ジョセフ・チェノットゥ大司教様です。

（ティース・グンドラッハ牧師）

ドイツから参りましたティース・グンドラッハと申します。今日こうして、非常に貴重な両教会の会合に一緒にいることができて、とても嬉しく、誇りに思っております。特にルーテル、プロテスタントの皆さんにご挨拶申し上げますし、また、これからの共同のお祈りを一緒にすることを喜んでおります。ありがとうございます。

（フランク・ロンゲ博士）

グンドラッハ博士と昨日一緒にこちらに参りました、フランク・ロンゲと申します。ドイツのカトリック司教協議会で働いております。ドイツにおいては、昨年から1年間、宗教改革500年をともに記念するために、特にお祝いを「キリストの祭」と名付けて、一緒に記念の行事を続けてきました。今日また、ここで皆さんと一緒に、それをできることをとても嬉しく思っております。今朝、グンドラッハ博士と一緒に、原爆公園、爆心地の公園を一緒に歩きました。とても非常に深い印象を覚えました。そして、それと2つの教会、他教派も含めて、この宗教改革を一緒に記念するということの意味を非常に深く感じました。ありがとうございます。

（ジョセフ・チェノットゥ大司教）

こんにちは。私は、ここ長崎の浦上教会で、宗教改革記念礼拝に列席できることを大変うれしく思います。この礼拝において、私たちは、平和といつくみと和解を求め続けている現代社会の鼓動を感じ取り、心を新たにするよう求められています。教皇フランシスコが述べているように、私たちキリスト者は、ゆるし、刷新、和解を自分自身の中で、日々実践して初めて、信頼できる証人（あかしびと）になることができます。私たちは永遠の救いに招かれている、一人ひとりの人間の尊厳を守り、高めることを通して、神のいつくしみをともに喜んで、実際に告げ知らせ、あらわすことができるのです。ありがとうございました。

（白川道生牧師）

　続きまして、お名前をお呼びすることによってのご紹介とさせていただきます。お名前を呼ばれた方は前にお進みいただければ幸いに存じます。

　まず、テゼ共同体アジア地域担当者ブラザー・ギラン様です。
続きまして、日本キリスト教連合会常任委員会書記であられまして、日本聖公会管区事務所総主事であられます、矢萩新一（やはぎしんいち）司祭です。
世界宗教者平和会議WCRP日本委員会平和推進部長であられます、篠原祥哲（しのはらよしのり）様です。
今回この会のシンボルフラワーとしてご提供いただきましたカンナ・プロジェクト橘 凛保（たちばなりほ）様です。
長崎宗教者懇話会の皆様です。午後からご出席をくださることになっています。
それから、長崎キリスト教協議会の皆様です。
日本エキュメニカル協会理事長　松山與志雄（まつやまよしお）様、
日本キリスト教団議長　石橋秀雄（いしばしひでお）様、
日本聖公会司教　五十嵐正司（いがらししょうじ）様、
日本聖公会エキュメニズム委員　市原信太郎（いちはらしんたろう）様、

　50年間のカトリックとルーテルの世界的な対話の委員会でございます、一致に関するルーテル＝ローマ・カトリック委員会委員、日本福音ルーテル教会牧師の鈴木浩（すずきひろし）様、

　この記念の会にともに集う幸いに感謝申し上げます。ありがとうございました。

宗教改革500年共同記念礼拝
すべての人を一つにしてください

礼拝式文

Reformation 500th

- 司　式 -

前田万葉大司教（日本カトリック司教協議会 副会長）
大柴譲治牧師（日本福音ルーテル教会エキュメニズム委員会 委員長）
日本福音ルーテル教会牧師・カトリック教会司祭

- 説　教 -

立山忠浩牧師（日本福音ルーテル教会 総会議長）
髙見三明大司教（日本カトリック司教協議会 会長）

- 福音書朗読 -

山脇　守 司祭（長崎大司教区 司教総代理）
齋藤幸二牧師（日本福音ルーテル教会 東海教区長）

- 「共同声明」のわかちあい -

松本義宣牧師（日本福音ルーテル教会 西教区長）
菊池　功 大司教（東京大司教区・12月16日着座）
岡田　薫 牧師（日本福音ルーテル教会 北海道特別教区長）
大塚喜直司教（京都司教区）

- 共同祈願 -

ティース・グンドラッハ牧師（ドイツ福音主義教会 神学・教育部門議長）
フランク・ロンゲ博士（ドイツ・カトリック司教協議会事務局長代行、信仰と養成局長）
ジョセフ・チェノットゥ大司教（駐日ローマ教皇大使）
矢萩新一司祭（日本キリスト教連合会）
橘　凛保さん（カンナ・プロジェクト代表）　　他

peace

開式

＊前奏

＊開始の歌

著作権の関係上、この部分は公開しておりません。

＊開式宣言

司式）　父と子と聖霊のみ名によって。

一同 ）　アーメン。

司式）　皆さん、これから、わたしたちは宗教改革500年をともに記念する礼拝を始めます。争いから交わりへ、対立から対話へと歩んできた道を未来につなげ、すべての人が 一つになるように、ともに祈りましょう。

みことば

＊福音朗読

ヨハネによる福音書１７章２０～２６節

（イエスは、天を仰いで言われた。）「また、彼らのためだけでなく、彼らの言葉によってわたしを信じる人々のためにも、お願いします。父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちの内にいるようにしてください。そうすれば、世は、あなたがわたしをお遣わしになったことを、信じるようになります。

あなたがくださった栄光を、わたしは彼らに与えました。わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためです。わたしが彼らの内におり、あなたがわたしの内におられるのは、彼らが完全に一つになるためです。こうして、あなたがわたしをお遣わしになったこと、また、わたしを愛しておられたように、彼らをも愛しておられたことを、世が知るようになります。父よ、わたしに与えてくださった人々を、わたしのいる所に、共におらせてください。それは、天地創造の前からわたしを愛して、与えてくださったわたしの栄光を、彼らに見せるためです。正しい父よ、世はあなたを知りませんが、わたしはあなたを知っており、この人々はあなたがわたしを遣わされたことを知っています。わたしは御名を彼らに知らせました。また、これからも知らせます。わたしに対するあなたの愛が彼らの内にあり、わたしも彼らの内にいるようになるためです。」

＊説教

＊沈黙

＊感謝の歌

著作権の関係上、この部分は公開しておりません。

＊福音朗読

ヨハネによる福音書１５章１～５節

わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。わたしにつながっていながら、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる。しかし、実を結ぶものはみな、いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをなさる。わたしの話した言葉によって、あなたがたは既に清くなっている。わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながっていなければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていなければ、実を結ぶことができない。わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。

＊説教

＊沈黙

＊感謝の歌

著作権の関係上、この部分は公開しておりません。

和解と平和

＊回心の祈り

司式）祈りましょう。
いつくしみ深い神よ、改革と刷新を目指す行いは、しばしば対立を生み、不幸な結果をもたらしてきました。自分たちの弱さを嘆き、悔い改めるわたしたちを 主よ、あわれんでください

一同）応唱 ♪

著作権の関係上、この部分は公開しておりません。

司式）福音の真理のうちに一つになるようにとのみことばに、こたえることのできなかった先達やわたしたちの罪をゆるし、分裂の痛みをいやしてくださる 主よ、あわれんでください

一同）♪「キリエ・エレイソン」

司式）共同体としても個人としても、思い、ことば、行い、怠りによって、分裂を生み、多くの壁を築いてきたわたしたちに、互いにゆるし合う力を与えてくださる 主よ、あわれんでください

一同）♪「キリエ・エレイソン」

司式）全能の神、いつくしみ深い父がわたしたちの罪をゆるし、永遠のいのちに導いてくださいますように

一同） アーメン

＊「共同声明」の分かち合い

2016年10月31日に行われた、スウェーデンのルンド大聖堂におけるルーテル世界連盟とローマ・カトリック教会の宗教改革共同記念礼拝における「共同声明」より

①

実り多いエキュメニカルな対話と苦しんでいる隣人に対する共同の奉仕をとおしてわたしたちは、わたしたちを結び付けるものがわたしたちを分かつものよりも大きいことを学んできました。

宗教改革によって受けた霊的、また神学的な賜物に深く感謝しながら、わたしたちはまた、ルーテル教会もカトリック教会も教会の目に見える一致を傷つけてきたことをキリストのみ前でざんげ し、悲しみます。

わたしたちお互いの見方を曇らせてきた傷と記憶の癒しをわたしたちは祈ります。わたしたちは過去と現在のすべての憎しみと暴力、特に宗教の名によって言い表されてきたそれらを強く斥けます。

②

わたしたちは十字架にかかり、挙げられたキリストにおいて見えるものとされている神のいつくしみ深い恵みに応えて、相共に証しすることを堅く誓います。完全な一致を求めて、洗礼に根拠づけられている交わりにおける更なる成長に深く関わります。

わたしたちは、十全な一致の具体的な現れとして、ひとつの聖卓で聖餐を受けることを心から願っています。そしてわたしたちはキリストにあってひとつとなるという人々の霊的な渇きと飢えとに応えるべき、わたしたちの牧会的な共同の責任を認識しています。

③

わたしたちは、特に貧しい人々のために、人間の尊厳と権利とを高め正義のために働き、あらゆる形の暴力を斥けることにおいて共に奉仕に当たることができるよう、霊の導きと勇気と力とを 神に祈ります。

尊厳、正義、平和、和解を切に求めているすべての人々にわたしたちが近づくようにと、神は呼び掛けておられます。暴力や過激主義の終結のために声を挙げ、知らない人々を受け入れ、戦いや迫害のゆえに逃れることを強いられた人々に助けの手を差し伸べ、難民や亡命を求める人々の権利を守るよう、共に働くことを強く求めます。

④

わたしたちは将来の世代が神の世界をその可能性と美しさのすべてにおいて享受する権利を認めます。わたしたちは、この被造の世界のために愛と責任をもってこれを導くよう、心と思いが変わっていくように祈ります。

エキュメニカルな友を含め、キリストを信じる信仰において近付けられ、互いに耳を傾け合い、わたしたちの関係においてキリストの愛を生きることによって、わたしたちは、三位一体の神の力に心を開き、キリストに根ざし、キリストを証しして、すべての人に対する神の限りない愛の信実の使者となるのです。

＊共同祈願

司式）ここに集わせていただいた喜びに満たされ、すべての人と全世界の救いのために、心を一つにして祈りましょう。

①

Jesus Christus, du Sohn des lebendigen Gottes, unser Heiland, unsere Hoffnung, unser Erlöser: Wir kommen zu dir mit der Last unserer Entzweiung und Trennung: Wir kommen zu Dir mit den Schatten der Vergangenheit.Wir kommen zu dir in Scham und Trauer über das Leid, das aus unserem Streit entstanden ist.Vor dir bekennen wir unsere Schuld und rufen dich an in unserer Not.
Wir wissen keine andere Zuflucht als dein unergründliches Erbarmen. Vergib uns, was uns von dir und voneinander trennt.Im Licht Deiner Wahrheit erkennen wir unser Versagen: unseren Mangel an Behutsamkeit und Geschwisterlichkeit, unseren Mangel an Zuwendung zueinander und Respekt füreinander.Schenke uns den Geist der Versöhnung, der wegnimmt, was uns trennt, und uns glaubwürdige Schritte zur Einheit der Kirche gehen lässt.
Jesus Christus, Du, unser Heiland, du unsere Hoffnung, du unser Erlöser: Sei du das Brot, von dem wir leben.Sei du das Licht, durch das wir sehen.-Sei du der Weg, auf dem wir gehen.
Amen.

一同）主よ、わたしたちの祈りを聞き入れてください。

［日本語翻訳］

生ける神の子、イエス・キリスト、私たちの救い主、私たちの希望、贖い主、私たちは、分裂と離別という重荷を抱えてみ前にいます。過去に起こった影を引きずってみ前にいます。争ってきた苦悩ゆえに、恥と悲しみを覚えてみ前にいます。み前にあって私たちは咎を告白し、あなたに助けを呼び求めます。

あなたの尽きせぬ憐れみのほかに逃れ場はありません。私たちをあなたから隔て、お互いをも遠ざけてしまった事々をおゆるしください。あなたのまことの光の中で、私たちは過ちを受け止めます。慎しみと兄弟姉妹のつながりが欠けていました。互いへの関心と敬いが欠けていました。隔てを取り除けるよう和解の霊をお与えください。教会の一致へと確かな歩みができますように。

イエス・キリスト、私たちの救い主、希望、贖い主、私たちが生きるための糧となってください。私たちが見えるように光となってください。わたしたちが辿るべき道となってください。アーメン

（2016年発行のEKD及びドイツ司教協議会共同発行による共同宣言2017）

［英語翻訳］
Jesus Christ, Son of the living God,our Saviour, our Hope, our Redeemer:
We come to you with the burden of our division and separation:
We come to you with the shadow of the past. We come to you in shame and sorrow at the suffering that has arisen from our conflict.Before you we confess our guilt and call to you in our need.
We know no other refuge than your unfathomable mercy.Forgive us for what divides us from you and from one another.In the light of your truth we recognise our failure:Our lack of carefulness and brotherly and sisterly relations,our lack of mutual attention and respect.Bestow on us the spirit of reconciliation that removes what divides us,and allows us to take credible steps towards church unity.
Jesus Christ, our Saviour, our Hope, our Redeemer:Be the bread from which we live.Be the light through which we see.Be the path down which we walk.Amen.

②
父である神よ、わたしたちがキリスト教一致と世界平和のために祈るとき、あなたはわたしたちの中におられます。わたしたちは固く信じています。御子イエスが、わたしたちのために仲介者としてみ前で執り成し、「世が信じるようになるために」（ヨハネによる福音書17章21節）、ご自分の弟子たちが一つになるよう願ってくださることを。
世界があなたのいつくしみの力を信じることができるよう、わたしたちに一致のたまものをお与えください。アーメン。

一同）主よ、わたしたちの祈りを聞き入れてください。

［英語翻訳］
God our Father, we know that you are present in our midst as we pray for Christian unity and peace in the world.
We are convinced that your Son Jesus intercedes for us as our mediator before you, asking that his disciples may be one, “so that the world may believe” (John 17:21).
“Grant us the gift of unity, so that the world may believe in the power of your mercy”. Amen.

③
主なる神様。多様化した現代世界のなかで、様々な賜物と伝統をもつ各々が対話し、祈りと心を合わせてゆく道が示され、共なる道を歩む友となれますように。平和の実現に向けた使命を互いに確認しあい、同じ時を生きる私たちを共通の祈りで満たしてください。

一同）主よ、わたしたちの祈りを聞き入れてください。

④
神様。私たちが、いまここで手にしているのはカンナの球根です。ヒロシマに投下された原子力爆弾は、人間だけでなく、多くの生き物も死滅させてしまいました。ところが、原爆で焼き尽くされ、放射能で汚染された焼野原に、わずか一か月後に咲いた花がありました。この事実を伝え、平和と希望のしるしとして育て、平和を願う心をつないでゆきたいと願っています。どうかこの祈りを祝福してください。

一同）主よ、わたしたちの祈りを聞き入れてください。

⑤
神様。これまでに与えられ、そしてこれから導かれる出会いを感謝します。
私もその存在もそれぞれの輝きを与えられ、共に神に造られ、求められ、愛され、赦されている者として、互いに尊敬し、学び合う喜びに満たしてください。

一同）主よ、わたしたちの祈りを聞き入れてください。

⑥
神様。生きることの苦しさへの喘ぎや、自分の存在の乏しさに打ちのめされての呻きが聞こえます。その傍らにどうかあなたがいてください。私たちがキリストの手足として仕えることで、あなたの慰めと癒しを証しさせてください。

一同）主よ、わたしたちの祈りを聞き入れてください。

⑦

神様。あなたは私たちに互いに愛し合うよう教えてくださいました。にも拘らず、私たちはあなたの御心から離れ、憎しみと怒りに捉えられ、敵意を抱き分裂と争いをくりかえすのです。あなたの御前に立つ私たちの罪を赦し、清めてください。そしてどうか私たちを新しく愛し助け合う者としてください。

一同）主よ、わたしたちの祈りを聞き入れてください。

⑧

神様。私たち日本にあるキリスト教会は、痛みをもって先の戦争を振り返ります。あなたの御心に尋ねることをせず、時勢に流されてアジアの多くの人々に苦しみを与えてきた戦争に加担し、日本の勝利を祈り、多くのいのちを失わせてきたのです。教会が同じ過ちを繰り返すことのないよう導いてください。

一同）主よ、わたしたちの祈りを聞き入れてください。

⑨

神様。私たちは自らの豊かさを求め、この自然世界に対して公害や汚染、特に核による放射能によって、暴力と破壊をもたらしています。どうか、私たちがあなたに与えられた世界の保全の責務を果たし、この大地を大空、そこにある全てのいのちを守っていくことができますように導いてください。

一同）主よ、わたしたちの祈りを聞き入れてください。

⑩

神様。この世界には争いが絶えず、多くのいのちが今も奪われています。小さな子どもたち、貧しい人々、病いや障がいに苦しむ方々、差別され小さくされた者たちが苦しみの中に置かれています。どうぞ、あなたの愛によって一人ひとりを助けてください。そのためになすべきことを私たちに教えてください。

一同）主よ、わたしたちの祈りを聞き入れてください。

結びの祈り

司式）いつくしみ深い神よ、御子キリストの光に照らされ、あなたからいただいた使命に向かって、今新たに歩み始めるわたしたちを力強く導いてください。
聖霊の喜びのうちに、あなたの愛を多くの人々と分かち合っていくことができますように。わたしたちの主イエス・キリストのみ名によって。

一同）アーメン。

＊平和のあいさつ

司式）主の平和が皆さんと共にありますように。
互いに平和を祈り、挨拶を交わしましょう。

ー　お近くの方と「主の平和」と挨拶を交わします。

＊主の祈り

司式）主の教えに従って、心を合わせて主の祈りをささげましょう。

一同）天におられるわたしたちの父よ、
み名が聖とされますように。
み国が来ますように。
みこころが天に行われるとおり地にも行われますように。
わたしたちの日ごとの糧を今日も お与えください。
わたしたちの罪をおゆるしください。わたしたちも人をゆるします。
わたしたちを誘惑におちいらせず、
悪からお救いください。
国と力と栄光は、永遠にあなたのものだからです。
アーメン。

＊献金

恵みのうちに生かされていることに感謝し、共に平和の実現のために歩む献身の心を込めて、献げましょう。

賛美の間に献金かごが回されますので、お献げください。
この献金は両教会のエキュメニズム活動と平和活動支援のために、献げられます。
また聖堂の入り口において集めた折り鳩による祈りも共に献げます。

著作権の関係上、この部分は公開しておりません。

著作権の関係上、この部分は公開しておりません。

著作権の関係上、この部分は公開しておりません。

派遣

司式）いつくしみ深い神よ、天地の初めに、あなたの霊は水のおもてを覆い、みことばによって世界を造り、いのちへと呼び出してくださいました。
会衆）神よ、あなたに賛美をささげます。

司式）神よ、あなたは、ノアの洪水の時、水をあふれさせ、罪の終わりと新しいいのちの始まりをもたらし、これをキリストによる人類の再生のかたどりとしてくださいました。
会衆）神よ、あなたに賛美をささげます。

司式）神よ、あなたは、すべての人をキリストの恵みのもとに招き、水と聖霊にによって洗礼を受ける人を一つの民とし、愛と平和の使徒としてくださいます。
会衆）神よ、あなたに賛美をささげます。

司式）神よ、あなたの子どもであるわたしたちは、飢え渇く人にいのちの水を差し出し、互いに恵みを分かち合う兄弟姉妹となるよう召されています。
会衆）神よ、あなたに賛美をささげます。

司式）主よ、平和の祈りがこめられたこの鳩のしるしとカンナの球根を祝福してください。
一同 ）アーメン。

＊派遣の祝福

司式）宗教改革500年を共に記念した礼拝の終わりにあたり、神の祝福を願いましょう。わたしたちをキリストの一つのからだに結び合わせた聖霊が、この世界に正義と和解とを求め、神の国のいのちを生きるようにと、わたしたちを整え、遣わしてくださいますように。
会衆）アーメン。

司式）主イエス・キリストの恵みと、神の愛と、聖霊の交わりが、
あなたがた一同と共にあるように。
会衆 ）アーメン。

＊派遣のことば

司式）行きましょう。主の平和のうちに。仕えましょう。主と隣人に。
一同）アーメン。私たちは行きます。神の助けによって。

＊派遣の歌（退堂）

著作権の関係上、この部分は公開しておりません。

＊後奏　出口において祈りの折り鳩を差し上げます。
それぞれの場へと持ち帰り、平和の祈りを分かち合ってください。

説教

髙見三明大司教　日本カトリック司教協議会会長

ルターによる宗教改革から500年目、そして、ルーテル教会とカトリック教会が正式に対話を始めて50年目の今年、今日、ここ長崎のカトリック浦上教会で、日本福音ルーテル教会と日本カトリック司教協議会の共同主催による記念対話フォーラム・シンポジウムおよび合同礼拝が行われることは、それ自体、画期的なことであるだけでなく、今後の両教会の和解と一致に向けて、はずみとなることが期待されます。

それにしても、ルーテル教会とカトリック教会は、同じキリストとその福音を信じながら、500年もの間、異なった別々の教会であるかのように歩んで参りました。1962年から1965年まで開催された第二バチカン公会議の公文書の一つ、『エキュメニズムに関する教令』の冒頭に、次のようなくだりがあります。「主キリストが設立した教会は、単一・唯一のものである。しかし、数多くのキリスト教共同体が、自分たちこそイエス・キリストの真の継承者であると、人々の前で自称している。彼らは皆、自分が主の弟子であると公言するが、同時にそれぞれ考えが異なり、異なった道を歩いている。それはあたかもキリスト自身が分裂しているかのようである。このような分裂は、真に、明らかに、キリストの意思に反し、また世にとっては、つまずきであり、すべての造られたものに福音をのべ伝えるというもっとも聖なる大義にとっては、妨げとなっている。」（1項）

1.キリストが設立した単一・唯一の教会は、イエスと父なる神が「一つ」であるという事実に基づいています。

まず、わたしたちキリスト者は、三位一体の神、すなわち父と子と聖霊という3つの人格的存在が唯一の神であると信じています。イエスはご自分と父である神との関係について、「父はわたしの内におられ、わたしは父の内にいる」（ヨハネ10・38；14・10、11参照）と言っておられます。つまり、父である神と、子であるイエスは、互いに完全に相手の内におり、知り知られ（ヨハネ10・15）、愛し愛されながら（ヨハネ3・35；14・31）、「一つ」になっているということです。イエスご自身、「わたしと父とは一つである」（ヨハネ10・30）と明言しておられます。

ところで、イエス・キリストは、ご自分の死と復活によって、人類を罪、それも分裂の罪から解放し、12使徒を中心にご自分を信じる人々を「唯一の教会」として設立されました。しかし、教会は、イエスと父との関係を、単にモデルとして、一つにつくられたのではありません。教会はイエスと父とを結ぶ愛のきずな、交わりに参与させていただいているのです（一ヨハネ1・3）。イエスは、ご自分と父とが一つであるように、弟子たちおよび彼らの説教を通して、ご自分を信じる人々、すなわち、キリスト信者も一つであるようにと、父に祈られました（ヨハネ17・11、22参照）。そしてそれだけでなく、すべての人を一つにするために、死んで復活されました（ヨハネ11・52参照）。そしてその死と復活にあずからせるために、洗礼を定められました。洗礼を受けてキリストに結ばれた人は皆、「キリスト・イエスにおいて一つ」です（ガラテヤ3・26-28参照）。つまり、洗礼を受ける人々は、同じ一つの教会共同体に属し、その成員となるのです。パウロは、教会共同体をキリストの体にたとえて、わたしたちは「皆一つの体となるために洗礼を受け」(一コリント12・13)ました、と教えています。この「一つの体」は、多くの部分から成っていますが、唯一のキリストの体、すなわち、教会共同体のことです（ローマ12・5；一コリント12・12；エフェソ4・4参照）。

わたしたちは「キリストの体であり、また、一人ひとりはその部分」（一コリント12・27；エフェソ4・25b；5・30参照）です。そうであれば、わたしたちとイエス、および父との関係が、神秘的かつ、現実的なものであることが分かります。わたしたちはイエスの内におり、イエスもわたしたちの内におられるのです（14・20；15・4参照）。もちろん、それは洗礼を受けるだけでなく、「神の言葉を守り」（一ヨハネ2・5）、神の「愛にとどまり」（一ヨハネ4・16）、「互いに愛し合う」（一ヨハネ4・12）時、現実のものになります。何よりもイエスがキリスト信者の内におり、父がイエスの内にいるのは、キリスト信者が完全に一つになるためなのです（ヨハネ17・23）。

2.では、教会はどのようにして「唯一性（unity/　oneness）」を維持発展させたのでしょうか。

教会は、聖チプリアノが述べているように、「父と子と聖霊の一致に基づいて、一つに集められた民」（『教会憲章』4項で引用）あるいは“多くの部分から成る一つのキリストの体”（一コリント12・12）、“一人の羊飼いに導かれる、一つの羊の群れ”（ヨハネ10・16参照）なのです。

『使徒言行録』の初めの部分で、教会は当初から「一つ」であったことが強調されています。聖霊降臨のとき、使徒たちを中心に、120名ほどの人々が“一か所に集まって”いました（1・15；2・1）。信者たちは“一緒になって”（2・44-45）、つまり「心も思いも一つにして」、すべての物を共有し（4・32）分け合っていました。彼らは“熱い”「心を一つにして」、ソロモンの回廊に集まり（5・12）、あるいは神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、一緒に食事をしました（2・46）。ペトロとヨハネが投獄されたとき、皆“熱い”「心を一つにして」神に助けを求めました（4・24）。パウロは、党派に分かれた状態にあったコリントの信者に対して、「キリストは幾つにも分けられてしまったのですか」（一コリント1・13a）、と問いただし、“皆同じことを言うように”、つまり、“同じ言葉遣いをし”、“分裂ではなくすべてのことを同じように理解し、同じ考えで行いなさい”、と「主イエス・キリストの名によって」勧告しています（一コリント1・10）。

結局、教会が一つであるためには、成員メンバーが神との内面的な一致を保ち、成員同士、心と思いを一つにするだけでなく、根本的に唯一の父、一人の主、一つの霊、一つの信仰、一つの洗礼、聖餐、役務、愛の実行などが不可欠です（一コリント12・4-6,28-30；エフェソ4・4-7）。たとえば、「わたしたちは皆、神の子に対する信仰と知識において一つのものとなる」（エフェソ4・13）ために、「キリストの賜物のはかりに従って」（エフェソ4・7）奉仕の業を与えられています（エフェソ4・11-12参照）。

3.唯一であるはずの教会共同体の分裂という現実

他方、人類は最初の人の罪の結果、神から離反し、同時に人間同士および人間と被造界との分裂を広げ、深刻なものにしてきました。「人間は自己分裂をきたしている」ので、人間の生活は個人的にも集団的にも、善と悪の間の劇的な闘いの様相を呈しています（『現代世界憲章』13項）。それは現代に至るまでの、人類の歴史が示している通りです。

教会も現実には例外ではありません。キリストは教会を、「神との親密な交わりと、全人類の一致のしるし、道具」（『教会憲章』1項）として設立したはずですが、初めから分裂の兆しがありました。まず、12人の弟子のひとり、ユダがイエスを裏切りました。使徒たちの時代になると、ユダヤ教と異教から改宗したキリスト者同士が重大なことで論争をしました（使徒言行録15・1-31）。コリントではまさに分裂状態になりました（一コリ1・10-13など参照）。イエスが人間となられたことを

否定する人が現れ、教会共同体から除外されました（ニヨハネ7-11）。その後、正統信仰の教義が確立される過程において、“異端”とみなされた教義と共に、それを主張して譲らない人々は、教会から除外され分かれていきました。ニケア公会議のときのアリウス派、カルケドン公会議のときのネストリウス派などがそれです。こうして教会は、聖霊に導かれて、紀元7世紀までに正統信仰を確定し、さらに発展していきました。同じ信仰理解や、教会が一つであるための重要な、不可欠な条件ということです。

ところが、キリストの一致のための祈り（ヨハネ17・20-23）に反して、教会は、1054年、東方と西方に大きく分かれ、その500年後、西方教会は1517年10月31日にルターがいわば手掛けた「宗教改革」によって、分裂していきました。さらに1534年に英国国教会が分離し、唯一のはずの教会が多種多様に分かれていき、今日に至っています。

聖アウグスチノ修道会司祭だったルターの意図は、教会の「改革」だったわけですが、カトリック教会の当時の指導者たちは、自己改革の必要性を認識するよりも、ルターのいう「改革」の中身にいわば反発し、さらには聖書、信仰、義認などに関するルターの主張が、キリスト教教義の核心に抵触すると考えるようになり、排斥するに至ったのです。その結果、残念ながら、別々の異なる教会が生まれ、しかも対立することになりました。

だからこそ、宗教改革は教会の改革だったのか、分裂だったのか、という問題も含めて、過去の記憶を浄め、癒すと同時に、人物や出来事に失敗や過ちがあったことを互いに認め赦し合い、キリストの福音の真理に合致した、一致の回復を目指す必要があります。そのためには、神の啓示と聖書、信仰と義認、教会論、秘跡論などの根本的な信仰の要素に関して、可能なかぎり共通理解をするようにしなければならないと思います。

4.分裂と争いから一致へと交わりへ向かう姿を、現代社会に対するメッセージとする。

教会の中には、しかしいつも、改革や一致のために働く人々が与えられてきたことを忘れてはならないと思います。とくに過去半世紀において、カトリック教会は第二バチカン公会議で、教会（1964年）や、啓示に関する憲章（1965年）、『エキュメニズムに関する教令』（1964年）を公布し、遅まきながら、19世紀以来の教会一致

運動を積極的に推進しました。とくにルーテル教会とは、1999年に『義認の教理に関する共同宣言』(教文館、2004年)を、2013年には宗教改革500年に向けて歴史の検証と未来に向かう道筋を提言した共同文書『争いから交わりへ』(教文館、2015年)を発表しました。昨年10月31日には、両教会の共同主催により、フランシスコ教皇と世界ルーテル連盟ヨナン議長が、同連盟発祥の地、スウェーデンのルンド大聖堂で、合同礼拝を行いました。

両教会は、1989年に相互承認した、洗礼によってキリストの一つの体に属していることを認め、信仰の多くのもの、例えば、聖書と聖餐、奉仕職などを共有していることを喜びたいと思います。常に一致の視点から再出発し、十字架の上でいのちを与えたキリストの愛に倣って、各自自らを変容させ、福音の力を再発見し、世に対して神の慈しみを証ししながら、「目に見える一致」を目指して、努力しなければなりません。教会が唯一であることが、「神がイエスを遣わしたこと」(ヨハネ15・18-19;17・14参照)、そして、父が子であるイエスを愛しておられるように、人々を愛しておられることを世に証しすることになるからです(ヨハネ17・23参照)。

禁教令施行と迫害の中で、キリストへの信仰をつないできたキリシタンの歴史と被爆の地浦上で、両教会が分裂と争いから、一致と交わりへと転換しようと努力する姿を発信することによって、両教会自らの和解と交わりだけでなく、世界の和解と平和のために寄与することができれば幸いです。わたしたちは「キリストの平和」(エフェソ2・14-18参照)へと「招かれて一つの体とされたのです」(コロサイ3・15)から。

髙見三明大司教

説教

立山忠浩牧師　日本福音ルーテル教会総会議長

旧約聖書の詩編にこういう言葉があります。

「見よ、兄弟が共に座っている。なんという恵み。なんという喜び。」（133・1）

今日、このカトリックの浦上教会で、カトリック教会の皆さんと、わたしたちルーテル教会の群れが、またその他の、思いを一つにする方々が、共にここに座っているのです。なんという恵み、なんという喜びでしょうか。

ただ、ここに両教会の信徒の群れが一堂に会し、共に座ることができたことは、偶然に、いとも簡単にできたのではありません。「宗教改革500年」は、わたしたちルーテル教会にとっては、感謝すべきことであり、それを祝うことは当然でした。しかし、カトリック教会の皆さんにとりましては、マルティン・ルターは、カトリック教会に反抗した異端児でした。あるいは宗教改革は、教会を分裂させた忌まわしい出来事だったはずです。ですから、今日ここに、「宗教改革500年」を覚えるこの企画を共同で、ここに開催できるまでになったことは、大変恵み深い事であり、その経緯を、わたしたちは繰り返ししっかりと記憶に留め、それを大切にしていかなければならないと思います。

世界レベルでのローマ・カトリック教会とルーテル教会の神学的な対話が始まったのは、第二バチカン公会議の開催中の1964年に、『エキュメニズムに関する教令』が発布されてから3年後のことでした。それ以降、神学的な対話を中心に、継続的な積み上げができてきました。そして宗教改革の500年の記念の準備として、2013年には、両教会の共同の委員会による『争いから交わりへ』という報告書が出版されました。一昨年に日本語にも翻訳されました。そして先ほど髙見大司教が触れられましたけれども、昨年の10月31日の宗教改革の記念日には、スウェーデンのルンドにあります大聖堂で、教皇フランシスコとルーテル世界連盟（LWF）の代表であります、ムニブ・ユナン議長が、共同の祈りを開催し、共同の声明を出したことは、先ほどもまた触れられた通りです。この長い道のりに携わってくださった方々のご奉仕に対して、たちは感謝しなければなりません。

そして、この歩みの中で、特にわたしたちが覚えなければならないことは、どのようにしてこの困難なことが実現したかということです。まず行ったことは、背を向け合うことをやめたことです。顔を向け合うことから始めたのです。自分たちとの違

いを指摘するよりも、お互いが共通していることに対して、目を向け始めたのです。「ここがおかしい、これは間違いだ」と相手のことを指摘するよりも、その問題を自分たちが正しく理解しているかを考え直したのです。なぜ彼らはそういう主張をしているのかについて、耳を傾けることから始めたのです。先ほど聖書の言葉が2か所読まれました。「すべての人を一つにしてください」（ヨハネ17・・21）この主のみことばに我々は耳を傾けたのです。キリストの枝にいずれの教会も連なっていることに対して、わたしたちは、目を向けることを重要視していったのです。

宗教改革は、ルター自身も意図しなかったのですけれども、結果として、教会の間の争いと分裂を生み出してきました。100年前の宗教改革400年の時にも、その状態が続いたのです。イエス・キリストの「平和を実現する人々は幸いである」（マタイ5・9）という、この教えをそれぞれの教会が大切なことだとして、口にしながら、しかし、教会の中で争いと分裂が生じていたことに対して、わたしたちは鈍感であったのだと思います。宗教改革が、本来の福音に立ち返ることに対して、貢献したことを認めながらも、その宗教改革がもたらしました、もう一つの事実に目を向けて、そのことをわたしたちは、悲しみ、悔いたのです。だからこそ、宗教改革500年を迎えたこの記念すべき時に、このようにして、共同礼拝を象徴的なこととして、「争いから交わりへ」という、新しい歩みと、カトリック教会の皆さんとわたしたちルーテル教会のその群れが、ともに歩み出せることを喜び、神様に感謝をささげたいと思うのです。

この二つの教会がこのようにして、「争いから交わりへ」という、そのような踏み出しをしたことは、「あなたがたは地の塩、世の光である」（マタイ5・13,14）という主イエスの教えにもつながることです。なぜなら「争いから交わりへ」というその取り組みは、この世において証しをすることにつながっていくからです。日本だけでなく、いま世界でも争いが絶えることがありません。それどころか、戦争や紛争、暴力や差別などの不正や不義の恐れがわたしたちの周りに押し寄せてきています。そこで起こっていることはいったい何でしょうか。それは、互いが顔を向けて、お互いを理解しようとすることではなくて、背を向けていることです。相手に耳を傾けることをしないで、相手を非難し、断罪することです。その争いの根源にそのようなことがあることを、わたしたちは自分たちの教会の過去の歩みにおいてあったことを先ほど確認したのです。

日本におけるキリスト教会の存在は、カトリックの教会といえども小さなものだ

と言わなければなりません。わたしたちの日本福音ルーテル教会はなおさらのことです。ですから、「争いから交わりへ」という、この平和な歩みを、今日このようにして実現できたことも、「それは小さな、本当に小さな一歩ではないか」という人がいるかもしれません。しかしわたしは、確かにそう思えたとしても、今日のこの一致の歩みは、力強い明確な、「希望」を指し示したと言わなければならないと思うのです。

マルティン・ルターの残した一つの言葉に「この世を動かす力は希望である」という言葉があります。わたしたちは、この共同の礼拝を通して、「小さな希望」を見たのですけれども、それは、「希望」は、両教会の中だけで終わるものではないのです。それがこのルターの言葉の意味しているところです。「今日の希望は、この世を動かす力がある」と教えているのです。たとえ今この世には、背を向け合うことや、争いが満ち溢れているとしても、決して絶望してはいけないのです。わたしたちが今日体験した、この希望があるからです。この希望は、今はろうそくの光のような小さな灯でしかないかもしれません。しかしこの希望には、この世に訴えていく力があり、この世を「争いから交わりへ」と向かわせていく力があることを、わたしたちは今日信じたいと思うのです。

この意味で、わたしは最後に、わたしたちがずっと目にしているこのパンフレットを含めた、ポスター、葉書に印刷されている、このロゴについて、特にカトリックの皆さまに、説明をさせていただこうと思うのです。この表紙のこのロゴです。このロゴは十字架の下に六つの手があるのです。両手には、手を完全に開いた左右の掌（てのひら）があります。その掌が次第に閉じられて、十字架の真下に両手を合わせた、その掌が置かれているのです。これは今日、この共同礼拝に集まったわたしたちが、思いを一つにしているキリスト者の掌を表しているのです。教会の恵みを、両手を広げた掌でいっぱい受け取りまして、それを、感謝をこめて、平和を願ってわたしたちは、十字架の元に集まって、そこで掌を合わせて神様に祈りを献げたのです。でもそれで終わるのではないのです。その閉じた掌は、今度はこの礼拝堂をこの聖堂を去る時に、その掌をわたしたちはもう一度開いていくのです。今日受け取ったこの希望の恵みを、わたしたちは掌を広げて、隣人へと証しをしていくのです。この世に向かって、そのことを我々は分かち合っていくのです。その思いを込めたのが、このロゴの印でありました。このロゴは白い色で印刷をしてございますけれども、元々は5色の色にデザインされているのです。青、黄色、黒、緑そして赤です。これは言うまでもなく、この世を表しているのです。全世界を表しているのです。

ですから、我々は今日、神様の恵みを自分たちの恵みだけに留めるのではなくて、この平和への希望を両手で受け取ったわけですから、それをこの世に、この世界の隣人たちに分かち合っていきたいと思うのです。それを我々は伝えていく、そういう手になっていきたいと思うのです。神様の祝福をお祈りいたします。

立山忠浩総会議長

共同記念礼拝　式次第・式文に関する報告と解説

準備委員　石井祥裕

はじめに

2017年11月23日、カトリック浦上教会で行われた宗教改革500　年共同記念礼拝の式次第・式文について、その作成経緯についての報告と解説をいたします。礼拝式全般の構想・準備作業は、準備委員会一同（ルーテル：白川道生、石居基夫、安井宣生、カトリック：宮下良平、光延一郎、久志利津男、石井祥裕……敬称・肩書等名略）であたり、一部は礼拝小部会（石居・安井・石井）で立案し、すべてルーテル－ローマ・カトリック共同委員会の承認を経て決定されました。

1. 作成経緯概略

(1)　テーマ「すべての人を一つにしてください」

このたびの宗教改革500　年共同記念行事全体のコンセプト「平和を実現する人は幸い」を受けて、礼拝は「すべての人を一つにしてください」を主題とすることが早くから決まりました。

(2)　二つの主要な前提資料

礼拝式を構想するにあたり、二つの資料を土台としまた。

一つは2014年11月30日にカトリック東京大司教区カテドラル関口教会で開催されたカトリック教会、日本聖公会、日本福音ルーテル教会の三教会による「エキュメニズム教令50周年合同礼拝『いつくしみと愛のあるところ』」の礼拝式（以下、2014年合同礼拝と称す）。これは《開式》《み言葉の賛美》《一致の典礼》《派遣》という4部構成のもので、《み言葉の賛美》の部分は、第1朗読（旧約）旧約朗読－答唱詩編－第2朗読（使徒書）－マニフィカト－アレルヤ唱－第3朗読（ヨハネ福音書17章20－26節）－説教というふうに、概ね両教会の主日礼拝の形式に則るものでした。《一致の典礼》の主要部分に第2バチカン公会議の「エキュメニズム教令」の一節の朗読が置かれていたのが特徴です。このほか、シンボルとして、水の儀（洗礼の想起）と復活ろうそくからの配火がありました。

もう一つの資料は、『争いから交わりへ：2017年に宗教改革を共同で記念するルーテル教会とカトリック教会』ルーテル／ローマ・カトリック共同委員会訳　教文館　2015、原題“From Conflict to Communion: Lutheran-Catholic Common Commemoration of the Reformation in 2017.”Report of the Lutheran-Catholic Commission on Unity, 2013;　以下『争いと交わりへ』と称

す）に基づく世界レベルでの共同記念礼拝モデルです（“Common Prayer From Conflict to Communion Lutheran-Catholic Common Commemoration of the Reformation in 2017. 以下Common Prayer と略）。この式次第は《開式》《感謝の儀》《回心の儀》《平和の儀》という4部構成で、聖書朗読は福音書の朗読（ヨハネ福音書15章1－5節）だけで、各所に『争いから交わりへ』の朗読を編入している点、両教会から説教者が立つ共同説教などに特色がありました。

⑶　礼拝式第1案

2016年8月に、開催会場となるカトリック浦上教会で行われた準備委員会では、全体のコンセプトづくりに専念する中、シンポジウムで扱われるべきテーマと共同記念礼拝で扱われるべきテーマの割り振りを構想し始めました。

2017年1月～2月の準備委員会では、上述の二つの礼拝モデルの諸要素を分析し、取捨選択に入るとともに、シンボル的なものとして2014年合同礼拝で使われた水の儀のほか、長崎＝被爆の地、平和への願いという主軸テーマに関係するシンボルとして「折り鳩」（折り紙の鳩）というアイテムの導入（鳩は一般にも平和のシンボルであり、かつキリスト教においても父と子の一致、全人類の一致のために働く聖霊のシンボルであることを考慮）、広島の原爆の時、焼け野原でも咲いた花カンナをシンボル・フラワーとして平和運動を進めるカンナ・プロジェクトとの連携で、カンナの球根の配布というアクトを礼拝に織り込むことが提案され、ともに準備が進められました。

2014年合同礼拝、およびCommon Prayer においても要素となっていたニケア・コンスタンチノープル信条ないし使徒信条といったキリスト教の信条の宣言に関して、これを入れないということも決まりました。キリスト教会の内的信仰確認よりも、分裂への反省の共同実行から、普遍的な平和への奉仕に向かうという、今回の記念行事の柱の一つを明確にしようという意味合いからでした。

ここまでの準備作業や諸提案をもとに礼拝式第1案が作成されました。これは《開式》《みことばの賛美》《和解と平和》《派遣》の4部構成で、そのうちの《みことばの賛美》は2014年合同礼拝と同様の形式であること、《和解と平和》ではCommon Prayer にならって『争いから交わりへ』第6章の「五つのエキュメニカルな責務」の宣言のようなものを入れることを主軸としていました。この第1案をもって2017年3月7日のルーテル－ローマ・カトリック共同委員会に報告されました。

(4)　礼拝式最終案に向けての大幅な変更

2017年4月17日に現地浦上教会で開催された準備委員会において、聖堂に立って、式の実際像を想定する作業が始められました。東京での会合のために写真撮影もしておきました。それをもとにいっそう礼拝式の具体化に向かった5月～6月の準備委員会では、第一案からの大きな発想の転換が行われました。浦上の聖堂の内陣正面に大きな十字架のキリスト像があることがインスピレーションの源となり、なによりもこの共同記念礼拝を「キリストから」「福音から」開始するというコンセプトが形作られ、それに基づいて礼拝式全般を簡潔なものにしようという方向で組み直されることになりました。全体が《開式》《みことば》《和解と平和》《派遣》と4部構成は同じながら、それぞれを簡潔にしました。特に《みことば》での聖書朗読を福音朗読だけに、しかもこれを二つにし、それぞれについて説教が行われることとなりました。福音朗読者と説教者はそれぞれルーテルとカトリックを交互に割り当てることにより、福音の前での相互に対等な交わりが表現されることになりました。

《和解と平和》では、共同祈願に関して、準備委員会で準備する意向文のほかに、ドイツから迎える両教会代表や駐日ローマ教皇大使、日本のキリスト教諸教会の代表から意向文の提供を依頼することになりました。Common Prayer をヒントにした「五つのエキュメニカルな責務」の宣言の扱いに関して、ここに2016年10月31日にスウェーデンのルンド大聖堂で行われたルーテル世界連盟とローマ・カトリック教会の宗教改革共同記念礼拝における「共同声明」（以下「ルンド共同声明」と略）の趣旨を加えることが提案されました。やがて9月の初めには、これらを組み合わせることが実際的に難しいと判断され、結局、具体性に富む「ルンド共同声明」に依拠することとなり、その主要内容を抜粋した4つの文章にまとめ、両教会からの代表者4名による朗読をとおして一同で確認し合う「共同声明の分かち合い」と位置づけることになりました。

礼拝式全体を通しての歌に関しては、両教会準備委員からの提案が順調に進み、また「折り鳩」（メッセージ入り）の募集も始められました。

ようやく到達した礼拝式最終案は 9月13日のルーテル－ローマ・カトリック共同委員会に報告され、承認されました。そのあとは、細部の調整、式文の練り込み、楽譜掲載に関する許諾申請手続き、式次第書の準備、役割分担の細目など実務的準備に移りました。浦上教会の聖堂での具体的な動き方に関しては、すべて前日に決まったという次第です。

2. 式次第・式文の主な特徴

別ページ所収の式次第・式文について、そこに記されていない「動き」を補足しながら、特徴や意義を略記いたします。

《開式》

全員が席についている。祭服色（ストラの色）は赤。宗教改革の色でもあり、殉教の色、聖霊の色でもあるというすべての意味合いが重ね合わされた。

内陣壇上にはゲスト、両教会からの司式者、朗読者、説教者、奉仕者、司祭・牧師は混ざり合って着席。沈黙の中で前奏が始まり、アンジェラスの鐘。内陣正面の十字架のキリスト像がライトアップされ、テゼー共同体の賛歌「すべての人よ　主をたたえよ」の歌が、後方の聖歌隊席から始まり、聖堂全体を包んで歌われる。開始宣言によりこの礼拝の趣旨を簡潔に告知。

《みことば》

神のみことばの象徴として、祭壇の上で大聖書が開かれ、「福音朗読ー説教ー沈黙ー感謝の歌」という構成が二度。「キリストの福音からの始まり」が印象づけられる。福音朗読の第一はヨハネ17章20～26節（2014年合同礼拝と同じ）。感謝の歌はまさにこの箇所に基づくカトリック教会の『典礼聖歌』387番「神はキリストのうちに」。福音朗読の第二はヨハネ15章1～5節（CommonPrayerと同じ）。これに対する感謝の歌は、ルーテル教会の古いコラール「神はほめたたえられよ」。その第1節は14世紀半ば、つまり宗教改革以前にマインツで作られた詩、第2節と第3節はルターの作によるもの。ルター作の詩がここで歌われたことも意義深い。

《和解と平和》

復活ろうそくに火がともされ、キリストの光に照らされながら、回心の祈りをテゼーの「キリエ・エレイソン」の応唱とともに唱えられたあと、ルンド共同声明の分かち合い。⑴分裂の歴史への反省、⑵　一致への願い　、⑶人間の尊厳、正義と平和、和解への責務、⑷被造世界と将来世代のための責務を表明する4つの文章がそれぞれの教会の代表者によって朗読。(1)松本義宣・日本福音ルーテル教会西教区長、 (2)菊地功・カトリック東京大司教、(3)岡田　薫・日本福音ルーテル教会北海道特別教区長、(4)大塚喜直・カトリック京都司教がそれぞれ担当した。

これに続く共同祈願は、次のような特色ある意向をもってささげられた。

意向①：ドイツの両教会からのゲスト、T.グンドラッハ牧師とF.ロンゲ博士が共

唱。これは、2017年3月11日、ドイツ、ヒルデスハイムのミカエル教会で行われた共同記念礼拝で唱えられた祈り（両教会の「共同宣言2017」に含まれる）を共唱。

意向②：駐日ローマ教皇大使J.チェノットゥ大司教がヨハネ17章21節を引用した全体テーマにちなむ意向

意向③：日本キリスト教連合会を代表して矢萩新一司祭（日本聖公会）より、平和の実現についての意向

意向④：カンナ・プロジェクト代表橘凛保さんによりこの礼拝でこの礼拝における平和と希望のしるしであるカンナの球根が配られ、分け合う意味が告げられる。

意向⑤～⑩：礼拝部会作成の6つの意向をカトリックとルーテルの各代表者により先唱。⑤は小林宏子修道女（聖マリア修道女会会員、日本カトリック・エキュメニズム委員）⑥は廣瀬美由紀さん（日本福音ルーテル長崎教会信徒）、⑦は深堀勝さん（カトリック浦上教会信徒。前評議会議長）、⑧は木村 猛さん （日本福音ルーテル教会保谷教会信徒。日本福音ルーテル教会財務担当常議員）⑨は開ヒロ子さん（カトリック浦上教会信徒。女性部会長）、⑩深町創太さん（日本福音ルーテル箱崎教会信徒。九州教区青年会代表）。

特に⑧に日本の戦争加害への反省をこめた意向、⑨の放射能汚染などを含む地球環境に対する加害への反省をこめた祈りなどは、長崎という地、21世紀初頭の世界の現状を顧慮した教会の思いを告げるものであった。

平和のあいさつに続く「主の祈り」は、カトリック教会・日本聖公会が使用している共通訳口語文に基づく本文がルーテル教会でも正式に採用されたことが明示される形となった。

続いて献金。両教会のエキュメニズム活動と平和活動支援のために。また準備されてきた折り鳩もここで少年少女たちの奉仕によって奉納。このときに歌われた歌は、カトリック教会提案から「キリストの平和」（塩田 泉 作）、「わたしをお使いください　マザー・テレサの祈り」（上村幸一郎作）、ルーテル教会提案の「ひとつになろう」（スウェーデンで作られた讃美歌）と、キリストによる一致から全世界の人々の一致、そのためのさまざまな活動への奉仕の心を歌う意味で、和解からの世界奉仕への広がりが表現される。

《派遣》

はじめに水をもってする神への賛美と祝福を願う祈り。2014年合同礼拝では開式で使われた水のシンボルを派遣に際して、今一度、神の創造とあがないのわざのしるし、洗礼によるキリストとの一致とキリストによる神の民の一致のしるし、飢え渇く人々に差し出すいのちの水のしるしであることを想起し、集められた折り

鳩、分かち合われたカンナの球根への祝福を願う祈りとして構成された。

派遣の祝福と派遣のことばも、平和の実現を目指す、主と隣人への奉仕への派遣であることを告げる。派遣の歌「わたしたちはイェスから」（スウェーデンで作られた歌）は、キリストから始まったこの礼拝から派遣されていくことを告げ、礼拝全体の意味が集約された。

3. 総括

長崎での開催が決まってから1年半の準備作業の中、礼拝に関しては資料収集・比較・分析に基づく構想から現地の状況に即した具体的な形成まで、紆余曲折があったともいえますが、盛会をもって終了したあとの時点から回顧すると、そこには、さまざまなところで、主の配剤があったことを思わずにはいられません。

2014年合同礼拝からの流れ、『争いから交わりへ』邦訳出版（2015年）に至る両教会の協力、2016年ルンドでの共同記念礼拝、2017年3月11日ドイツで行われた共同記念礼拝、それ先立つ努力、協力、共同の礼拝の経験が今回の浦上での共同記念礼拝に合流しているということができるでしょう。なによりも、ヨーロッパから世界への宣教と日本の歴史が交わるとともに、世界と日本の戦争と平和の問題が交わる長崎の地で行われたこの礼拝の意味が、十字架、光、聖書、折り鳩、カンナ、水などによって印象深くシンボライズされていました。祈りのメッセージが記して心を込めて作られ、全国から寄せられた色とりどりの折り鳩は、退堂に際して配布もされましたが、残ったものも大切に保管されて、この礼拝の記憶となっています。

礼拝をとおして両教会から提案された歌は、現代日本語による簡潔で力強い賛歌として、今後も広く歌われていくきっかけになればと思います。

2017年11月23日、カトリック浦上教会で行われた宗教改革500年共同記念礼拝の余韻は映像記録とともにこれからも残っていくでしょう。その形式も内容も、画期的な歴史的意義をもつものではないかと思います。あの日、この礼拝は実施され、完了はしましたが、過去のものとなったわけではありません。まさにあの日から始まり、これからも続けていくべき祈りと協働のための確固とした試金石であると思います。主に感謝！

当日、配信された映像は、
以下のURLからご覧いただけます。
https://luther500.wixsite.com/commemo
スマホやタブレットなどで、
左の二次元コードからもアクセスできます。

Reformation 500th

《宗教改革500年共同記念　シンボルフラワー》
「広島の原爆とカンナの花」

1945年8月6日午前8時15分。人類史上初の原子力爆弾が、広島に投下されました。原爆は一瞬のうちに広島の町を破壊し、焼き尽くし、大勢の人の命を奪いました。

そして原爆は人間だけはなく、多くの生き物、動植物も死滅させてしまいました。原爆で焼き尽くされ、放射能で汚染された焼け野原には、「75年は植物が生えない」と言われました。

ところが、原爆が落とされた地点からたった820mというところに、わずか1か月後に咲いた花がありました。焼け野原に鮮やかに咲いた花があったのです。真っ赤なカンナの花でした。朝日新聞カメラマンの故松本栄一さんが、原爆投下の1ヶ月後に撮った一枚の写真（上掲）に記録されている事実です。

焼け後によみがえった緑は多くの人に勇気を与えました。「こんなに小さな花が、原

爆に負けずに咲くなんて」。

この事実を知り、平和のシンボルとして広めたいと思い立ったのは橘凛保さん。そこからカンナの球根を植え育てる活動が始まりました。そして平和の実現に向けた株分けリレーは様々な出会いを生み出してきました。

「カンナを見るたびに、広島の原爆のことを思い出します」、「平和の象徴として、カンナを育ててゆきましょう。増やしてゆきましょう」、「ヒロシマの焼け野原に咲いたカンナ。子どもたちに大切な事を伝えてくれてありがとう」。 平和の実現に向けた取り組みは、広島をはじめ日本各地、さらに世界14か国で花を咲かせています。

◎非営利任意団体Canna Project（代表：橘 凛保/Riho.Tachibana）

カンナ・プロジェクト 検索

前ページに掲載の写真は、「広島平和記念資料館」に大きなパネルとなって展示され、同史料館のリニューアルに伴い、2017年6月に長野県須坂市へと移譲されました。

《感謝にて。カンナに込められた平和を願う祈りの受け渡し》

2017年、宗教改革500年共同記念「平和を実現する人は幸い」の準備において、この日を出発として平和の実現に向けた具体的な一歩につなげてゆきたいと思いめぐらし、祈ってきました。そして、平和教育実践を続けてこられたカンナ・プロジェクトとの出会いに導かれ、今回、シンボルフラワーとしてご提供をいただきました。

カンナに込められた平和を願う祈りの受け渡しに深く感謝しています。「同じ球根から株分けしたカンナのバトンをつなぎながら、想いを馳せあってゆく。相手を思い合う心が、その土地に爆弾を落とせない心を育む」と信じ、平和の実現にむけて歩み続けておられます。

来たる2020年に東京オリンピック・パラリンピックが予定されておりますが、五輪会場に植えられるメッセージフラワー候補の一つに選ばれていると伺っております。

カンナの球根についての ご案内

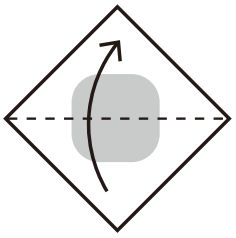
◎ご事情により、育成が困難と思われる方は、お帰りの際に受付にお戻しください。
長崎にて育成してまいります。

◎球根の特性上、この時期には埼玉茨城以北の地域では、植え付けができません。
長崎で育成をしてくださる方がいらっしゃいますので、一緒に育ててまいります。
該当地域の方で、来春に、球根の送付を希望される方は、下記へご相談ください。

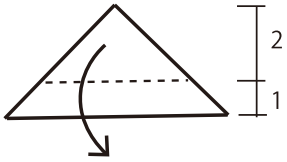
［連絡先］
日本福音ルーテル教会 事務局
〒162-0842　東京都新宿区市ヶ谷砂土原町1-1
TEL 03-3260-8631　FAX 03-3260-8641
MAIL jelc@jelc.or.jp

祈りの折り鳩

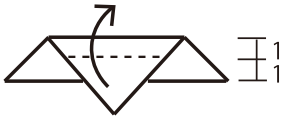
①真ん中あたりに祈りを書き、半分に折る



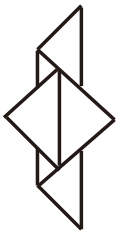
②点線で折る



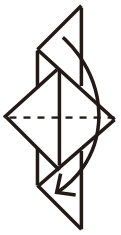
③点線で折る（上の1枚のみ）



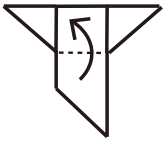
④左へ90度回転する



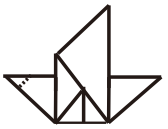
⑤点線で折る



⑥点線で折る（裏面も同様に）



⑦点線で折り、戻す



⑧中に割り入れるように折り、はとの完成♪

礼拝出席者に加え、全国各地の教会から寄せられたものも合わせて、平和への祈りを込めて折り鳩を献げます。
礼拝後に祈りの折り鳩も出席者と共に派遣されます。それぞれの場で平和の祈りを分かち合っていただければ幸いです。

感謝のことば

共同主催式典「宗教改革500年共同記念～平和を実現する人は幸い～」を企画し、準備し、実施できたことは、日本カトリック司教協議会の司教様方のご支援と日本福音ルーテル教会の教師会の皆様のご支援なくしては実現できなかったことであります。ここにあらためて関係しました皆様に心から感謝申し上げます。

また、式典主催地を引き受けてくださったカトリック長崎大司教区の髙見三明大司教様が陣頭に立って、長崎の浦上教会での式典開催に向けて支援してくださり、大司教様の指示を受けて貴教区事務局と浦上教会の神父様、信徒の皆様が万全の準備をしてくださったおかげで、これからの日本における福音宣教への方向性を示す恵み豊かな式典を開催することができました。準備のために尽力してくださった関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

「日本の信徒発見」、「浦上四番崩れ」そして「旅の始まり」という一連の出来事から150年を迎えた中での「宗教改革500年共同記念」行事は時のしるしに適ったことでその計らいに感激するばかりです。これからの「旅する教会」に神様の豊かな祝福がありますよう衷心より祈念しましてご報告と感謝の言葉といたします。

日本福音ルーテル教会・日本カトリック司教協議会

「幸いを実現する人は幸い」
午前十時～午前十二時
午後一時～午後三時

photograph フォトグラフ

石居基夫牧師
橋本 勲神父

では、その分裂は、その後どうなったのか?
500年の間に歴史は動いてきました。しか
ながら、それを知る人は多くはありません

石原孟夫

受付
カトリック信徒

使用許諾等

●『聖書 新共同訳』

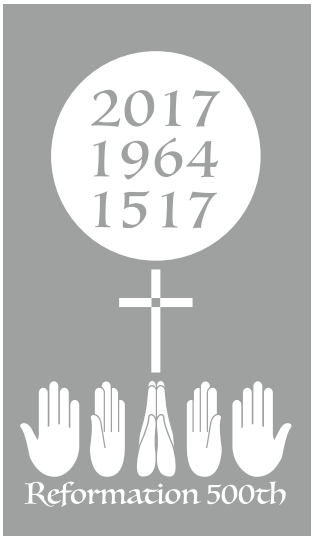
©共同訳聖書実行委員会

Executive Committee of The Common Bible Translation

©日本聖書協会

Japan Bible Society , Tokyo 1987,1988

●楽譜については、著作権の関係上削除して掲載しております。



平和を実現する人は幸い

日本福音ルーテル教会／日本カトリック司教協議会
宗教改革500年共同記念　報告書

2019年11月23日発行（2000部）
発行者　日本福音ルーテル教会
日本カトリック司教協議会
ローマ・カトリック＝ルーテル共同委員会
発行所　日本福音ルーテル教会事務局
〒162-0842　東京都新宿区市谷砂土原町1-1